

# 観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

## 特集◎ 縄文文化と現代 — 三内丸山に学ぶ

### ◆巻頭言

岡本太郎と縄文の発見 赤坂 憲雄……①

### ◆特集

- 縄文文化と次世代ツーリズム  
— グリーンライフ・ツーリズムの可能性 石森 秀三……②
- 三内丸山に見る縄文人の暮らし  
— 定住を支えた自然環境と社会的背景 西本 豊弘……⑥
- 三内丸山遺跡の保存と活用  
— 世界遺産を目指す「JOMON」 岡田 康博……⑩
- 三内丸山と市民を結ぶ  
— 「三内丸山縄文発信の会」発足とその諸活動 菊池 正浩……⑭

### ◆視点

- 「平成の大合併」後  
— 合併せずに生きる過疎自治体の観光・交流事業のあり方 朝倉 はるみ……⑰

### ◆二百号特別企画座談会（後編）

「旅は世につれ」……⑳

ゲスト：池内 紀氏・山口 由美氏／司会：外川 宇八

### ◆新着図書紹介……㉓



## 身延往還・赤沢宿

険しい山々に新緑がまぶしく輝く五月初旬、溪谷と壮大な樹林に囲まれている山梨県早川町の赤沢宿を訪ねてみた。ここは、かつて白装束に身を固め修験の霊山「七面山」に登った修験者や日蓮宗総本山の「身延山」へ祈願に訪れた諸国の旅人の身延往還として繁栄した宿場である。石畳の急な坂道を上っていくと両側に旅籠が軒を連ね、往時をしのばせる。

今は訪れる人もほとんどなくひっそりと佇んで（たず）いるが、手つかずの街並みは素晴らしい文化遺産として一九九三年（平成五年）に重要伝統的建造物群保存地区に指定された。

歴史をひもとけば江戸時代からこの宿場は「全戸（現在、世帯数二十八戸、住人六十八人）が望月姓を名乗っていた」と地元民が語ってくれた。修験霊山の「七面山」にまつわる伝承や古文献が多く残され、武田氏家臣団の末裔であった歴史と伝説に彩られている。古き時代の面影が、山々に抱かれ自然と溶け合い、はるかな時の流れを感じさせてくれる宿場である。

（写真・文 樋口健二）

あの『太陽の塔』を創った前衛芸術家・岡本太郎こそが、紛れもなく縄文文化の発見者であった。それはしかし、意外なほどに知られていない。いや、忘れられたと言っべきか。戦後間もない、晩秋のことだった。太郎は上野の東京国立博物館で、縄文の土器のかけらや土偶との衝撃的な出会いを果たした。それを「四次元との対話——縄文土器論」と題した論考に仕立て、『みづゑ』という美術雑誌に発表した。センセーショナルな反響を呼び起こした、という。それから、六十年ほどの歳月が過ぎている。

例えば、ここにいう「発見」とは、何を意味しているのか。それは取りあえず、モノやコトに対して、新たな知の文脈に根差した意味の付与を行うことである。近世に、第一の発見があった。十八世紀の末、紀行家の菅江真澄などは、土器片のスケッチを残し、「縄形、布形の古き瓦」「網代らしき紋様」といった観察を行い、「いにしへの蝦夷」が作ったものかという推測まで書き留めていた。第二の発見は、アメリカの考古学者・E・S・モースによってなされた。大森貝塚の調査・研究の中で、「縄紋」の紋様を持つ土器について記述し、「縄紋土器」という名付けの先駆けをなした。縄文考古学の幕開

## 岡本太郎と縄文の発見

東北芸術工科大学東北文化研究センター所長

赤坂 憲雄

けである。

そして、第三の発見が岡本太郎その人によってなされる。太郎はいわば、縄文土器そのものとの対話を試みたのである。そこに縄文人の美学を認め、それを世界観の結晶として読み解こうとした。強烈な表情、激しい流動性、シンメトリーの拒絶、破調、ダイナミズム、混沌、無限の回帰と逃走……狩猟文化の影。縄文土器を単なるモノとしてではなく、縄文人の心や精神が宿りするウツワとして眺めること。太郎はまさに、縄文土器に新たな命を吹き込み、縄文人の精神世界を甦らせたのである。

その発見の舞台が東京国立博物館であったのは、偶然ではない。若き日、パリに留学していた時に、太郎はマルセル・モーヌの下で本格的に民族学を学んだ。この民族学を光源として、縄文文化が発見されたのである。単なる芸術家の思いつきや直感ではない。未開社会の仮面や神像の中に隠されている、豊かな精神世界を解読する方法を、太郎は知っていた。だからこそ、縄文土器に対して、民族学の方法をもってアプローチすることができたのである。縄文文化は今、第四の発見の季節を迎えているのかもしれない。(あかさか のりお)

# 縄文文化と現代

## ——三内丸山に学ぶ

三内丸山遺跡は日本最大級の北の縄文集落遺跡です。一万年にもわたって持続した縄文社会の自然環境や文化的背景と、北海道や北東北で進められている縄文遺跡の世界遺産登録へ向けた取り組みなどを紹介し、今後のツーリズムの可能性について考えます。

## 縄文文化と次世代ツーリズム

### ——グリーンライフ・ツーリズムの可能性

北海道大学観光学高等研究センター長

大学院観光創造専攻教授

石森 秀三

### 北の縄文文化

北の縄文遺跡というと三内丸山遺跡（青森県）が有名であるが、実は北海道にも数多くの縄文遺跡が存在する。二〇〇九年に「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」が世界遺産暫定一覽表に記載されたが、そのうちの大船遺跡（函館市）、鷺ノ木遺跡（森町）、入江・高砂貝塚（洞爺湖町）、北黄金貝塚（伊達市）は北海道に存在する。

縄文文化は、約一万五千年前から約二千

三百年前まで、一万年以上にわたって日本列島で展開されたといわれている。北海道では本州よりやや遅れて一万四千年前ごろの縄文土器が発見されている。約三千年前に九州北部で始まった水稲耕作を伴う弥生文化はやがて本州北部にまで広がった。ところが北海道では稲作農耕が行われずに縄文文化が二千三百年前まで続き、その後も縄文文化の特色を受け継ぐ「続縄文文化」が一千三百年前ころまで続いたといわれている。そういう意味で、北海道は日本列島の

中で縄文文化が最も長く継続された地域と言うことができる。縄文人は自然環境と調和しながら集落を作り、豊かな定住生活を送っていた。一万年以上にわたる長い歳月に生じた環境変化に巧みに適応しながら、「生命の循環と再生」に基づく信仰を育み、自然と共生する持続可能なライフスタイルを世代から世代へと営々と引き継いできた。秋には川にサケが上り、森で木の実が稔る恵み豊かな北海道の大地も、冬には深い

雪と厳しい寒さに覆われる。やがて廻り来る春になると、生命が輝き、歓びに満ちあふれる大地に変わる。北海道の縄文人（そして後のアイヌの人々）は自然のサイクルとともに生き、日々の恵みをもたらす自然環境を大きく改変することなく、長い歴史を営々と積み重ねてきた。

## 今なぜ縄文文化か？

私は今、「北の縄文文化を発信する会」の代表幹事を務めている。二〇〇六年四月に北海道大学観光学高等研究センター長に就任したが、それ以前の三十一年間は国立民族学博物館に勤務していた。二十五年ほど前に観光研究を始めるまでは、オセアニア地域の文化人類学的研究が専門だった。

一九七八年から八〇年までの間に二度、ミクロネシアのサタワル島という絶海の孤島で約一年間調査を行った。その島に行くには、二カ月に一度程度運航される連絡船に乗って行かねばならない。電気も水道も電話もない、いわば近代文明とは隔絶された前近代的な島で、人口約五百人のサンゴ礁の島だ。男性はふんどし一本、女性は腰布一枚でトップレスで暮らしており、主食

はタロイモ、副食は主として魚類、人々はココヤシの葉で葺いた住居に住んでいた。

私もふんどし一本になってサタワル島で暮らしたが、関西の大都市で生まれ育った私にとって島暮らしは驚きの連続だった。男の世界と女の世界が明確に分かれているが、島全体としては巧みに男女間の調和が図られていた。島の政治は成人男性が集会を開いて決するが、家庭内の問題は女性が中心になって決める。主食のタロイモ農耕は成人女性が行うが、副食の魚類は成人男性が島の近くで素潜りで捕る。しかも漁獲の少ない時には高齢者と子供にだけ魚が分配され、普通程度の漁獲の際に成人女性も分配にあずかる。成人男性は大漁の時にのみ魚の分配にあずかるが、島でヤシ酒を飲めるのは成人男性だけだ。

私が島に滞在していた約一年間に、島の人々がけんかや口論をしているのを一度も目撃したことがない。資源に乏しい絶海の孤島に暮らしているのに、人々は無駄を慎み、互いに互いのことを気遣いながら日々の暮らしを営んでいる。近代文明を身に着けた私は、前近代的な暮らしを営むサタワル島の人々から「人間の本来の生き方」につ

いて多くのことを学ぶことができた。サタワル島では自然と共生する持続可能なライフスタイルが維持されており、縄文文化に類する貴重な経験ができたと感じている。

今、世界的に「低炭素社会」を築いくことが人類共通の課題となっており、自然と共生する持続可能なライフスタイルを一万年以上にわたって継続させた縄文文化から学ぶべきことが多くある。もちろん現在の日本では縄文文化の遺跡しか残されておらず、縄文ライフスタイルは消え去っている。私は今、「観光創造学」という新しい学問を提唱しており、北海道の大地において縄文文化の伝統（縄文ライフスタイル）を観光の局面で生かす方策を研究している。

## 縄文文化と観光

日本では一九六〇年代以降にマスツーリズムが隆盛化した。団体で観光名所を周遊するというマスツーリズムを主導したのは旅行会社や観光開発会社であった。しかし縄文遺跡が観光名所として周遊ルートに組み込まれることはまれであった。九〇年代に入ってから官主導でニューツーリズムの動きが活発化した。農林水産省によるグリー

ンツーリズム、環境省によるエコツーリズムを筆頭に、ヘルスツーリズムや産業観光などがニューツーリズムと位置づけられているが、縄文文化の伝統が観光振興に生かされることはほとんどない。

マスツーリズムは旅行会社主導による発地型観光であるが、ニューツーリズムは地域主導による着地型観光を目指している。またマスツーリズムが「団体旅行・名所見物・周遊」型観光であるのに対して、ニューツーリズムは「個人・夫婦・家族旅行・参加体験・滞在」型観光を目指している。マスツーリズムは旅行会社や観光開発会社の主導で隆盛化した。現在では衰退傾向にある。ニューツーリズムも「官」の支援を受けて地域主導で振興されているが、補助金の終了とともに停滞している。

ツーリズム新時代を迎えて、北大観光学高等研究センター（以下、北大観光研）は「次世代ツーリズム」の研究に着手している。これまでのツーリズムは旅行会社や観光開発会社、地域社会など供給側の主導によって展開されてきたが、次世代ツーリズムは旅行者自らが主導する形で進展する可能性が高い。従来型の観光では縄文遺跡や縄文

文化がほとんど活用されなかったが、次世代ツーリズムでは「縄文ライフスタイル」の伝統を生かすことが可能である。

## ライフスタイル・イノベーション

日本では一九五六年の経済白書で「もはや戦後ではない」と宣言され、六〇年には池田内閣のもとで国民所得倍増計画が発表されて高度経済成長が加速した。それによって農村から都市への人口移動が六一年にピークに達した。そして六八年には早くも国民総生産（GNP）が世界第二位を記録し、経済大国への道をひた走った。八〇年代には「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とたたえられたが、ベルリンの壁崩壊とともにバブル経済がはじけ、グローバル化の進展に伴って日本経済の長期低迷が続いている。

日本では一九九七年に自殺者が年間三万人を超えて以降、毎年ほぼ三万人前後が自殺している。平均すると一日に百人近い人が人生に絶望して自ら命を絶っている。その一方で親が子供を殺し、子供が親を殺す事件も頻発するとともに、通り魔的に無差別殺人が行われる国になっている。さらに利根的な快楽を求めて、覚せい剤やドラッグ

グにおぼれる人も多い。

人と人のきずなが喪失し、自らを見失う人が多い現代日本において、観光を通して、人間が人間らしい生き方を回復することは不可能であろうか？ 北大観光研では、ライフスタイル・イノベーション（暮らしの革新）を促す新しい観光のあり方を「次世代ツーリズム」と位置づけて研究を行っている。

北大観光研の佐藤誠教授は、次世代ツーリズムとして「グリーンライフ・ツーリズム」や「セカンドホーム・ツーリズム」を提唱している。グリーンライフとは、緑や自然を大切にする田園や農村における暮らしを意味するだけでなく、大地に息づくすべての生命を尊重する暮らしをも意味している。暮らしと生命を輝かせる観光のあり方を創造しようとする試みが「グリーンライフ・ツーリズム」である。そして都会と田園を行き来するライフスタイルが「セカンドホーム・ツーリズム」である。

ふるさと回帰総合政策研究所は二〇〇九年に「田舎暮らしに関するアンケート調査」を都市住民に対して行った。それによると、「都会と田舎の二地域居住をしたいか」という問いに対して、四八・七％の人々が希望を

表明している。都市住民の約半数が田舎暮らしを望んでいるという驚くべきデータだ。しかし二世帯に一世帯が二地域居住を実践しているスウェーデンの事例を考慮すると、それほど驚く必要はないかもしれない。

さらに、「田舎暮らしのライフスタイル」への回答では、「二地域居住し、平日は都会、週末は田舎」が三二・九%、「どっぶり田舎暮らし」が二九・一%、「二地域居住し、季節により住み分ける」が二四・一%、「普段は田舎、時々都会」が二二・八%であった。大別すると、「セカンドホーム・ツーリズム志向」が六九・八%で、「どっぶり田舎暮らし志向」が二九・一%である。

## グリーンライフ・ツーリズム

欧米諸国では一九八〇年代に「ルーラル・ルネサンス」と呼ばれる田園回帰現象が生じた。過密都市から自然の豊かな田園地域に移住して、人間らしい暮らし方を取り戻そうとする動きが顕著に進展したわけだ。当時の日本はバブル経済に浮かれており、経済至上主義の生き方が幅を利かせていた。そういう意味で、三十年の時を経て、日本でもようやく欧米並みに「田園回帰現象」も

しくは「人間回復現象」が生じてきたわけだ。日本では一万五千年前から一万年以上にわたって縄文文化が継続された。縄文人はまさにグリーンライフの実践者だったので、現代の日本人にもグリーンライフ志向のDNAが内包されているはずである。現代日本では農山漁村の過疎化が進展し、都会暮らしが当たり前になっているが、歴史的に見るならば都市居住の隆盛化はたかだかの半世紀間の出来事にすぎない。そのように考えると、今後の日本でグリーンライフ・ツーリズムに基づく「田園回帰現象」もしくは「人間回復現象」が生じるのは、文明的必然と見なすことができる。

されど、課題が山積していることも事実だ。農業従事者の減少と高齢化による農山村の荒廃を克服して「アメニティー・リッチな田園の創造」を行うことは可能かどうか？二地域居住を希望する人たちに對して「田舎暮らし実現」に要するハードとソフトの提供は可能か？田舎暮らしを可能ならしめるための「グリーンライフ起業」はいかに実現できるか？「ムラのいのちをマチの暮らしへ、マチの活力をムラのなりわいへ」というあり方は可能か？などの課題を解決し

なければ、グリーンライフ・ツーリズムやセカンドホーム・ツーリズムの実現は困難である。

日本では一次産業従事者の比率が、一九五三年に四〇%であったが、二〇〇四年には四・五%に激減している。同様に、自営業者の比率についても、五三年に自営業者とその家族従業者が全体の五八%で勤め人が四二%だったが、〇四年には前者が一五%に減じる一方で後者の勤め人が八五%に激増している。このように、一次産業従事者と自営業者を増加させることは国家的課題になっており、グリーンライフ・ツーリズムはその面でも貢献が期待されている。

北大観光研はすでに「観光創造士」制度の提唱を行っている。グリーンライフ・ツーリズムやセカンドホーム・ツーリズムなど次世代ツーリズムの創造を行うためには、地域のさまざまな資源を組み合わせる新しい価値を生み出すことのできる専門的人材が必要になる。一定の要件を満たした人に対して公的資格としての「観光創造士」の認定を行うことによって、日本各地で新しい観光の創造に活躍できる人材を輩出させていきたい。(いしもり しゅうぞう)

# 三内丸山に見る縄文人の暮らし ——定住を支えた自然環境と社会的背景

国立歴史民俗博物館 教授

西本 豊弘

はじめに

先日、あるテレビ番組でゲームで負けたタレントに罰としてまずい縄文料理を食べさせるので、縄文時代の料理を教えてほしいという依頼があった。砂糖もしょうゆもない縄文料理は、まずい物の代表というにとらしい。しかし、具体的に縄文人が食べていた料理として、骨髄でダシをとりシカ肉やイノシシ肉とクリの実を入れた縄文鍋を示すと、これではおいしそうな料理で罰にならないという感想であった。

この例で見るように、縄文時代は遠い昔のことであり、狩猟漁労採集生活で十分な食料もなく、いつも粗末な食事をしていたと思っている人が多い。実際は、縄文人は現在よりも野草の知識が豊富で、食料も栄養のバランスがとれていた。縄文人の平均

身長は男で百六十センチ、女で百五十七センチと江戸時代人よりも五センチも大きい。一番貧しい食事をしていたのは江戸時代の庶民であった。そのため古い時代の人々の生活は貧しいというイメージがあるのである。そこで、縄文時代の生活を三内丸山遺跡を取り上げて紹介してみたい。

## 三内丸山遺跡の特徴

三内丸山遺跡は、青森平野を望む丘の上にある縄文時代前期約六千年前から中期末約四千五百年前に営まれた集落遺跡である。

この遺跡が注目される理由は、まず村の規模が大きいことである。野球場の建設のために発掘が始められたが、遺跡の実際の規模は野球場五個分以上である。竪穴住居跡が千軒以上見つかっており、長さ三十八メートルの大型建物や高床倉庫、地面に穴を掘った

た貯蔵穴もある。墓も、多くの石で丸く囲った配石墓といわれる首長クラスの墓と、個人の土坑墓の両方がある。さらに、墓地や住居、村の内外を結ぶ道路が数カ所で認められ、集落が計画的に作られていたことが分かった。

そして、縄文中期の人たちは、縄文前期の集落跡を整地して新たに集落を作ったことも明らかになった。縄文人も大きな土木工事を行っていたのである。このような土木工事や大型住居の建設は、各地の遺跡で少しずつ知られるようになっていたが、三内丸山遺跡ではそのすべての項目が備わっており、この遺跡の発掘とその保存・整備により、当時の生活全体を考える手掛かりとすることができたのである。そこで、三内丸山村の人々の生活を支えた食料などがどのようなものであったかが問題である。

## 三内丸山村の人口

青森県の遺跡データを時代ごとに調べてみると、縄文前期の段階では各河川の河口域を中心に遺跡が散らばって分布していた。それが徐々に集中し始めて、縄文中期後半になると青森平野には大きな集落が三内丸山だけとなる。そして、弘前平野に一カ所、夏泊の東側の平野に一カ所、太平洋側に一カ所、内陸に二カ所など、約五十キロ程度離れて青森県全体で数カ所の拠点的大集落が形成されていたようである。三内丸山遺跡のみを取り上げると、中期後半にはその周辺に中規模から小規模の集落が点在していたと推測される。

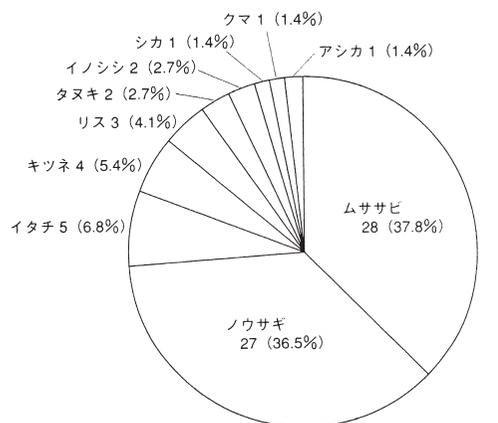
ところで、三内丸山遺跡では千軒以上の住居跡が確認されているが、それは約千五百年間のことであり、一時期に何軒が同時に存在したか分からない。そこで、三内丸山村の人口を推定するために、建物の柱材に注目してみた。よく知られている六本柱の建物をはじめとして、大きなクリの木柱が何本も発見されている。大きなものでは直径一メートルを超えている。長さも不明であるが、それが十メートルであった

としても、それらを切り出して運び一定の場所に立てるには、多くの人間が必要である。当時の技術を考えると、少なくとも五十人程度の成人男性が必要ではなからうか。もし男性五十人と仮定すると、成人女性が五十人存在することになる。縄文時代の家族は母系制であり、夫婦を基準として、母方の両親と夫婦の子供たち数人で構成されており、一族約十人と推定される。もし五十家族が一つの村を構成しているとすると、その村の人口は約五百人となる。三内丸山村の場合、建物の建設やお祭りの時に人々が集まる場所という説があり、近隣の集落からも木柱を立てるために人々が集まったかもしれない。しかし、縄文中期の拠点集落としての三内丸山村には、少なくとも二十家族二百人程度は生活していたと推測される。

## 動物資源の利用

三内丸山遺跡の動物遺体の特徴は、シカ・イノシシが少ないことである。縄文時代の貝塚ではよくシカとイノシシの骨が出土するが、筆者が集計した結果でも、地域によって、また時代によって若干異なるが、全体

では両者がそれぞれ三〇%以上を占めていて縄文時代の陸獣狩猟の主体はシカとイノシシであった。ところが、三内丸山遺跡の前期の遺物包含層ではシカとイノシシは両者を合わせても獣類の四%程度と少なかつたのである。この特徴は中期の包含層も同じであった。これは意外なことであって、この遺跡の動物骨の分類を行いながら、次はシカとイノシシが多い箱があるだろうと期待したものである。結局、最後までそれらの骨が少なかつたので、どこか別の場所にそれらの骨が捨てられたため残らなかつた



三内丸山遺跡の哺乳類の割合（動物名の後の数値は資料数）

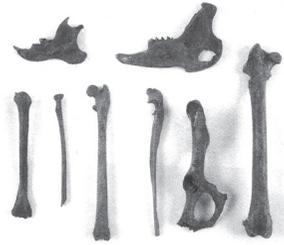
のではと考えたこともある。

この遺跡は青森という本州最北端であり、イノシシが生活するには寒かったとも考えたが、その場合、寒さにも強いシカが少ないのはおかしいことになる。さらに縄文早期末〜前期前半は、現在よりもかなり暖かく縄文海進とされている。この遺跡の形成時代である前期後半もまだ現在よりも暖かい時期でありイノシシの生息は可能である。そこで、骨角製品を見てみると、シカやイノシシの肩甲骨や肋骨を網針に用いていることが分かった。これらの部位は湾曲していたり骨稜があるために、東北北部以外の地域の遺跡ではほとんど道具に使われない部位である。三内丸山村ではシカとイノシシの骨を余すところなく道具に使っていたのである。やはり、シカとイノシシはあまり捕れなかったであろう。

獣類でシカとイノシシが少ないため、ムササビとノウサギが割合として多い結果となった。しかし、ムササビは空中を飛ぶために体重は比較的軽く肉量も少ない。主に毛皮を利用するための動物である。ノウサギも、食料となるが一個体当たりの肉量は少ない。鳥類はガンカモ類が多く出土して

いる。恐らく河口や干潟に飛来するカモ類が主な獲物となったであろう。しかし、それは三内丸山人の主要な食物であったと思われるほど多く出土していない。

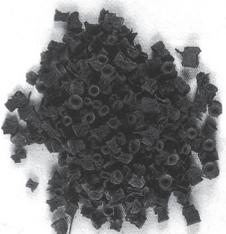
動物資源の利用で最も注目されたのは魚類である。この遺跡の場合、太平洋岸の貝塚遺跡で出土するマダイやスズキ、ボラ、ヒラメなどの沿岸に生息する魚類や、寒流系のマダラやニシン、ホシザメも捕獲されていた。対馬暖流と親潮が混ざり合う津軽海峡と陸奥湾に面していることから、暖流系と寒流系の両方の魚種を捕獲していたのである。その中で最も多いのはブリの子で、ハマチよりも小さい体長約三十センチの「ワカシ」と呼ばれる程度の個体であった。縄文人はマグロやカジキなどの大型魚も捕獲しており、ブリも縄文時代遺跡でよく



三内丸山遺跡出土の  
ムササビとノウサギの骨



三内丸山遺跡出土のホシザメの椎骨



三内丸山遺跡出土のブリの椎骨

出土するが、その多くは体長一メートル程度のよく成育したブリであり、一遺跡当たりの出土量は少ない。縄文時代の漁労活動は、沿岸に生息する魚類が海面近くを泳ぐマグロなどに限られていることが多い。ところが、この遺跡では沖合の中層を群れを成して泳ぐブリの若年魚を捕らえていたのである。恐らく対馬暖流に乗って陸奥湾に入ってくる群れを捕らえたのであろう。その場合、大量に捕獲できるが、生食だけではなく何らかの保存処理をして貯蔵しなければ食料資源として生かせない。この点については、遺跡で出土した骨の内容を見た時にブリ（ワカシ）の頭部の骨が少ないことと、椎骨の中で第一・第二椎骨が少ないことが分かった。つまり、頭部と内臓を一緒に除去して干魚などに加工していたことが推測

されたのである。

この遺跡の魚類の利用でもう一つ注目されたのは、イカとタコの口器とシヤコの触角が認められたことである。イカやタコ、エビやシヤコを食糧としていたとすれば、縄文人の食卓は豊かであったことだろう。

## 植物資源の利用

植物ではクリやクルミ、トチの実、イヌビエ、ヤマグワ、ヤマブドウ、エゾニワトコなどが出土している。その中ではクリの利用が中心である。大きな木柱はクリ材であり、クリの実の殻もたくさん出土している。さらに遺跡内の土壌の花粉分析を行うと、どこでもクリの花粉が多く含まれていた。恐らく、遺跡内だけではなく遺跡周辺にもクリの木が多かったのであろう。ヤマグワの木は、周囲の雑木を取り除いてやらないと周りの木に負けてしまうので、クリの木の周囲の雑木を除く管理が行われていたと推測されている。落ちたクリの実を採集するためにも、下草を刈るなどの管理が有効である。そのように考えると、クリ林は雑木が少ない明るい林であり、シカやイノシシは人に見つかりやすいので、生息

しにくい環境となる。ムササビにとつては樹間を飛び移りやすいかもしれないが、人間に捕獲されやすくなる。このような遺跡周辺の植生も哺乳動物の内容に反映しているのではなからうか。

クリのほかに、イヌビエの利用も考慮しなければならぬ。イヌビエがこの地域で縄文中期後半には意図的に利用されていたことが知られており、この遺跡でも、管理されたイヌビエが主要食物の一つとなっていた可能性がある。最近、山梨県や長野県で確認されたダイズがここでも栽培されていたかもしれない。エゾニワトコは、大量に一括して出土していることから、薬酒などに加工されていたのかもしれない。

## 交換による富の蓄積

三内丸山遺跡の出土資料は土器をはじめとして膨大であるが、その中でもヒスイの玉はこの遺跡が最も多く出土している。新潟県の糸魚川地域の製作地からこの遺跡を中継して北海道へ交易品として渡ったと推測されており、この遺跡はヒスイ交流の拠点の一つであった。縄文前期の物資の交流は、装飾品だけではない。例えば秋田県大

館市の池内遺跡では、ブリの若魚やサバの成魚、ヒラメやサメの椎骨が出土した。池内遺跡は日本海側からも太平洋側からも五十キロ以上内陸にあることから、ブリやサバが骨付きのまま内陸に運ばれていたのである。つまり、縄文前期には内陸部と海岸部を結ぶ交易ルートがあり、食料も交換されていたのである。縄文時代の三内丸山村が当時の交易拠点であったとすると、遺跡で消費される食料も、遺跡外から持ち込まれたことも考えられる。縄文村は自給自足とは限らないのである。

## おわりに

三内丸山遺跡は、縄文中期には北部日本の交換活動の中心という性格もあり、その背景には多様な食料資源があったと推測される。そして、物資が流通する拠点としての役割を持つとすれば、それらを調整・管理する首長が存在したのであろう。それが墓における配石墓と個人墓の区別に表れていると思われる。このように、縄文時代前期から中期には、日本列島各地に成熟した縄文社会が築かれていたのである。

(にしもと とよひろ)

# 三内丸山遺跡の保存と活用 ——世界遺産を目指す「JOMON」

青森県教育庁文化財保護課 課長

岡田 康博

## 世界遺産暫定一覧表記

二〇〇九年一月五日付で、青森県および北海道、岩手県、秋田県の四道県と関係自治体が共同提案していた「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」はユネスコの世界遺産暫定一覧表に記載された。暫定一覧表はわが国の世界遺産候補の正式なリストであり、これに記載されて初めて登録を目指すことができる。

この記載を受け、四道県と関係自治体は今後も連携して登録実現に向けて取り組むため、三村申吾青森県知事を本部長とする「縄文遺跡群世界遺産登録推進本部」を立ち上げ、さらに実務的な検討を行う「縄文遺跡群世界遺産登録推進会議」、専門的な検討を行う「縄文遺跡群専門家委員会」を設置し、着々と体制を整えている。今後は縄文

遺跡群の持つ顕著な普遍的価値の証明や世界的な位置づけ、適切な保護措置などを行うこととなる。現在のところ、四年間で推薦書案を作成し、おおむね二〇一五年の登録を目指している。世界遺産登録の最終的な可否を審査する世界遺産会議の近年の動向を見ると、登録件数は年々減少しており、そのハードルが高くなっていることは間違いない。万全な準備が必要である。

推薦書案作成と並行して国際的合意形成も進められる。日本考古学の成果を海外へ向けて発信するとともに、復元など日本独特の手法である遺跡整備についても、その考え方や方法等について周知し、正しく理解してもらう機会を設けなければならない。さらに「JOMON（縄文）」の知名度向上のためには外国語パンフレットなどの情報

発信が不可欠である。大英博物館で日本の土偶展が開催されるなど、一部では知られているもののまだまだ認知不足の感は否めないことから、欧米など世界遺産登録に大きな影響力を持つ地域でのワークショップの開催など宣伝活動も大事である。

## 縄文文化の意義

日本には約四十六万カ所の遺跡があり、そのうち縄文遺跡は約八万八千カ所。その四割が四道県に分布している。三内丸山遺跡など著名で、整備・公開されているとともに良好な状態で保存されている遺跡が多い。

約二万三千年前、氷河期が終わるとともに急速に温暖化が進み、クリ・クルミが実る豊かな落葉広葉樹の森が広がり、海面の上昇や降雨によって運ばれた土砂の堆積に



復元された集落

よって魚介類が豊富に生育できる地形や環境が形成された。縄文文化は日本列島で本格的な稲作が始まる約二千三百年前の弥生文化の開始まで、自然との共生のもと約一万年もの長きにわたり営まれた、高度に発達・成熟した狩猟採集文化であり、わが国の歴史の大半を占めるものである。ヨーロッパや大陸の同時代の文化と比較しても、本格的な農耕や牧畜を持たない、新石器時

代の文化としては極めて特徴的な様相を示している。

世界に先駆けて土器を生み出し、森や海・川の豊かな資源を利用するための技術や道具類も飛躍的に発達した。これらの多くは素材を変えながらも現在でも使用され、わが国のさまざまな産業の発展の礎を築いたと言える。定住化が進み、各地に集落が出現し、集落や地域社会を支えるための祭祀なども活発に行われるようになった。地域社会の成熟が進む一方、遠方との交流・交易も見られ、列島規模での人や物の移動、情報の伝達が積極的に行われた。また、漆の利用など工芸的な技術も新たに開発された。土偶など精神世界の豊かさを示す縄文文化独自の要素も生まれた。

弥生時代以降、本格的な稲作が列島に定着してもなお、北海道・北東北では縄文文化の伝統や影響が強く見られ、現代においても縄文文化に起源や系譜を求めることのできる文化的要素が数多く認められる。また、自然との共生に見られるように、日本人の価値観や自然観の形成に大きく関与するなど、日本の基層文化といわれ、まさに現代社会の基礎となった。

## 縄文観を変えた三内丸山遺跡

特別史跡「三内丸山遺跡」は、縄文時代前期中葉から中期末葉（今から約五千五百年前～四千年前）にかけての、わが国を代表する縄文時代の大規模集落遺跡である。遺跡は青森市の郊外、JR青森駅から南西方向約四キロメートルに位置し、八甲田山系から続く緩やかな丘陵の先端、標高約二十メートルの段丘上に立地し、範囲は約三十五ヘクタールと広大である。遺跡は古くから知られ、山崎立木の『永祿日記』（二六二三年）や菅江真澄の『すみかの山』（二七九九年）には、この地から土器や石器が出土したことが記載されている。一九九二年から、県営野球場建設工事に先立ち広範囲にわたって発掘調査を行ったところ、直径約一メートルの木柱による大型掘立柱建物跡が見つかるなど縄文時代の貴重な遺構や遺物の検出が相次ぐとともに、大規模な集落跡であることが確認され、全国的に注目された。大勢の見学者が訪れるとともに遺跡の保存を求める県民の声も高まり、青森県は当初の計画を変更して、建設工事の即時中止と遺跡の保存、整備・活用を決定

した。

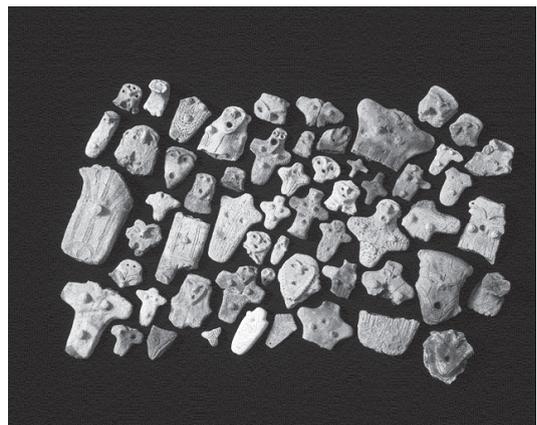
一九九五年からは史跡指定のための範囲確認調査を行い、一九九七年三月には国史跡、さらに二〇〇〇年十一月には縄文遺跡としては四十四年ぶりに国内三件目の特別史跡となった。出土品の一部は二〇〇三年五月に重要文化財に指定された。これまでに約五百七十万人の見学者があり、現在では年間三十万人以上が見学を訪れる、多くの国民に親しまれる遺跡公園として公開されている。

三内丸山遺跡は存続期間が長期間にわたり、集落を構成する各種遺構が計画的に配置された構造となっている。集落の施設として、堅穴住居・大型堅穴住居・成人用土坑墓・小児用甕棺墓（埋設土器）・掘立柱建物・大型掘立柱建物・盛土・捨て場（廃棄プロック）・粘土採掘穴坑・道路などがあり、多様である。なかでも東西に四百二十メートル以上延びる道路の両側に沿って配置された成人用土坑墓や南北に三百三十メートル近く延びる道路と環状配石墓は、当時の墓制や社会組織を知る上で貴重である。集落の変遷を見ると、集落の出現と同時に墓域と居住域の区別が明確になり、集落が大型化する縄文

時代中期にはその傾向はさらに顕著となる。施設も多様となり、数も多くなる。他地域との交流・交易を示すものや土偶などマツリに関係する道具も飛躍的に増えることから、拠点集落としての性格も一層際立ったものとなり、地域を代表する集落としてふさわしい姿となって行く過程が分かる。

遺物の出土量は膨大で、土器・石器のほかに日本最多の出土点数の土偶、低湿地から骨角器・木製品・漆器や動植物遺体が大量にしかも良好な状態で出土し、当時の環境や生業が具体的に復元されている。集落の出現とともにクリ林を中心とした縄文里山とも言べき人為的な生態系が成立していたことも明らかとなった。さらにヒスイ・琥珀・黒曜石など他地域との交流・交易を物語る遺物も出土している。高精度年代測定による暦年代の推定、遺伝子分析によるクリの栽培化など、自然科学的分析が積極的に行われ、重要な知見が得られている。

食生活に関係するものとして動物ではシカ・イノシシが少なく、ウサギ・ムササビなどの小動物や鳥類が多く、魚類は豊富でマダイ・ヒラメ・マグロ・ブリ・サバ・カレイ・イワシなどが、植物ではクリ・クルミ



出土した土偶

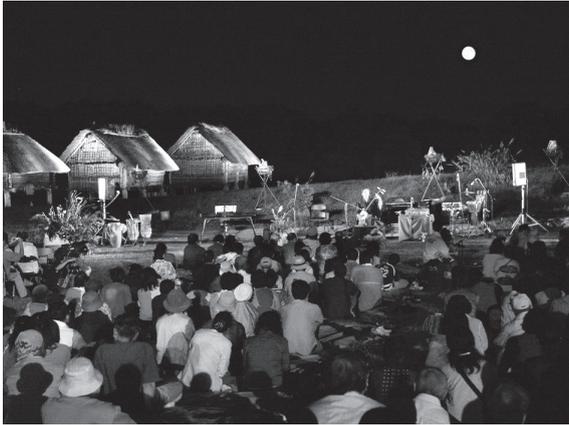
の堅果類、ヤマブドウ・キイチゴ・サルナシ・ヤマグワ・ニワトコなどが大量に出土している。特にニワトコは膨大な量で、酒造りの可能性が指摘されている。また、ヒヨウタン・マメ類・ゴボウなどの栽培植物の種子も水洗選別によって検出されている。木製品では漆器（皿・鉢・櫛）、弓、掘り棒、篋、草で編んだ袋、編布が、骨角器では針・銚先・牙玉・刺突具・骨刀などが出土した。

### おわりに

三内丸山遺跡は、「青い森と海」に支えら



体験学習・弓矢作り



お月見コンサート



ボランティアガイド

れ、自然とともに生きた縄文人の生活の様子や、生活の拠点である集落の姿や当時の社会、さらには縄文人の世界観を知る上で多くの有用な情報を持っており、現代社会の礎となった日本の縄文文化を考える上で欠かすことのできない重要な遺跡であることから、今後とも適切な保存と活用を進めていく必要がある。集落の全体像と当時の生活環境を解明するための発掘調査が毎年続けられており、調査現場が公開されているとともにその成果が常に発信されている。

今年七月には遺跡を総合的・体系的に紹介する新展示室もオープンする予定となっている。ものづくりを通じて縄文人の生活を体験学習も好評である。

また、遺跡では見学者のためにボランティアアガイドが案内を行い、草刈りなどの維持・管理についても地域住民が積極的に参加している。市民と行政が協働して、地域の文化遺産を次の世代に確実に伝えるためのさまざまな取り組みがされており、「遺跡と市民のかかわり」についての新たな姿も見え

てきている。

「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」は世界遺産候補となったが、これからが本番である。縄文文化の本質や特徴についての議論を重ね、共通理解を図り、縄文遺跡群の価値を十分に理解してもらうためには、何をどのような方法で主張すればよいのか、戦略を持つことが必要である。三内丸山遺跡を中心とする縄文遺跡群の世界への挑戦が新たに始まっている。

(おかだ やすひろ)

# 三内丸山と市民を結ぶ

## ——「三内丸山縄文発信の会」発足とその諸活動

NHKエンタープライズ情報文化番組部

エグゼクティブプロデューサー

菊池 正浩

### 縄文の原風景

私たちが、最初に目にしたものだ。

それは、野球場の建設予定地のグラウンド一面に散乱するおびただしい数の縄文土器だった。

その光景を目にした時、あまりの迫力に言葉を失った。

一九九四年夏、一躍脚光を浴びた青森市の三内丸山遺跡との出会いである。

今、思い返すと、すべては、あの衝撃的な出会いから始まったと言える。

二〇世紀末に、五千年の眠りから覚めて、こつぜんと姿を現した三内丸山遺跡。

出会いの衝撃の後、自問し、反芻し始める。これまでの縄文時代のスケールをはるかに超えた何かが、そこに紛れもなく存在している。形容し難いとても大きく大きな存在

である。六本の巨木。複数の盛土もりど。谷から出土する日常の暮らしの膨大な量の品々。五ヘクタールの野球場グラウンドの範囲をはるかに超えそうな集落の規模（最終的に四十ヘクタールを超える規模と推測されている）。

これらは、いったい何を物語っているのか？ 次々に膨れ上がるイメージと、新たな疑問。そして、心の底から、マグマのように、根源的な疑問が突き上げてくる。

現代の我々は、このままこの遺跡を葬り去っていいのだろうか？

これは、当時、遺跡を目撃した人の共通の感慨だったと言える。

この年の八月上旬、現地説明会に二日間で八千人の人が集まった。

結果として、行政を動かし、三内丸山遺跡は保存されることになった。

このことを作家の司馬遼太郎さんに報告した。司馬さんは、この年、『街道をゆく』の取材で青森を訪れており、たまたま小生がご案内する機会があった。司馬さんから、早速次のようなお手紙を頂いた。

「三内丸山遺跡は、県民だけでなく、私ども他に住む者にも勇気をあたえました。県下八千人の人々がきてくれたとのこと、近頃これほどのよろこびをおぼえたことはありません。一つは遠きものへのあこがれ、二つは遠きものを自分に組み入れる自己の確立のよろこびというものでしょう。他者からみれば、ただのアナボコをみてさまざまに想像を構築できる教養をひとびとは——戦後五十年のあいだに——身につけたということです。世界一のレベルではないかと思ったりします。お

手紙の返事の如き。八月十五日」

三内丸山を支えていたのは、確実に市民であった。二日間で八千人の市民が、炎天下、遺跡に集まったという事実が、我々の記憶に大きく刻まれた。市民が遺跡を後押ししている——、確実に、そんな実感があつた。

## 縄文列島の出現

縄文のブームは、これだけでは終わらなかった。一九九六年、鹿児島県で、上野原遺跡が発見された。上野原遺跡の丘に立った時、なぜかとても懐かしい気がした。錦江湾の向こうに桜島を望むそのロケーション



日本列島の歴史を変えた三内丸山遺跡

ンが、陸奥湾の向こうに恐山を望む青森県の三内丸山遺跡のそれと、不思議に共通した印象を受ける。

この三内丸山遺跡と上野原遺跡の発見は、長い目で見ると、極めて象徴的なことだった。それは、第一に、日本列島の開発の波が、二〇世紀の終わりに北と南に延びて、これらの遺跡の発見を促したことを意味する。三内丸山遺跡は野球場建設予定地から、上野原遺跡は工業団地建設予定地から、その姿を現した。

第二に、この二つの縄文遺跡の出現は、それまでの縄文のイメージを大きく覆した。その結果、縄文文化が、北から南まで大きな広がりを持ち、日本列島は、まさに縄文列島であることが、確実になったのである。

## 市民運動のスタート

三内丸山遺跡が一躍話題になった一九九四年の明るる年、私たちは、「三内丸山縄文発信の会」を結成した（その後、二〇〇三年にNPO法人になった）。

三内丸山遺跡の盛り上がりを一過性のものにしたくない、二〇世紀末に姿を現した縄文遺跡の意味、現代へのメッセージをしつ

かり受け止めたい、と思ったからである。

一般市民からマスコミ関係者まで、メンバーはさまざまである。

会の趣意書を見ると、当時の高揚した気分が改めてよみがえってくる。

「五千年の眠りからさめた青森の三内丸山遺跡。それは縄文時代のこれまでのイメージを塗り替えただけでなく、二〇世紀末のわたしたちの心を大きく揺さぶりました。三内丸山を契機に今、専門家から市民に至るまで起きつつある新しい動き——それを縄文学ととらえ、一九九五年を『縄文元年』と名づけることも出来るでしょう。この縄文元年にあたって、三内丸山遺跡の縄文の情報を全国に、そして世界に発信する『三内丸山縄文発信の会』の設立をここに提唱します。この会は、縄文の情報発信を活動の基調としながら、広く意見の交流を図り、将来の縄文博物館の創生を目指すものです。」

## こころ縄文人になろう

最初の熱気が収まって、しばらくすると、わたしたちの縄文発信の会で、一つの言葉が、しきりに話されるようになった。

それは、「こころ縄文人になろう」というもの。

会員の照井勝也さんが言い始めた言葉である。脱サラをして、自然に親しむ生活をしてきた照井さんは、今こそ、自然と共生する縄文人の心を取り戻そうという思いを込めて、「こころ縄文人になろう」と呼びかけた。この言葉は、次第に、会員の心に浸み込んで、今では、会の共通のモットーのようになっていく。

さらに、会の活動で忘れられないのは、毎年、三内丸山遺跡で開かれる『お月見縄文祭』である。

仲秋の名月前後の夕方、遺跡で月の出を待つ。そこに姿を現す月は、ふだん都会で見るとは、全く異なる。太古の昔、縄文人が仰いだ月を思わせる不思議な魅力に包まれている。一九九九年に初めて体験したその記憶が忘れられず、毎年毎年、縄文の丘に集まり、祭りは続けられてきた。今年で、十二回を迎える。

## 世界遺産を目指して

今、三内丸山遺跡は、新しいステップに直面している。三内丸山遺跡をはじめ、北

海道・東北の縄文遺跡を世界文化遺産にしようという運動が進められている。

三内丸山縄文発信の会では、これまで十五年間にわたって、『縄文ファイル』という機関紙を毎月欠かさず発行してきた。その特徴は、最新の縄文の情報を英語の翻訳付きで提供するというところにある。最初は、縄文という言葉はどう訳すかで頭を抱えたりしたが、通信社海外支局長の経験のある会員の力強い協力で、今日まで続けてこられた。世界遺産を目指す運動が現実のものとなって、これまでの努力がようやく実を結ぶ時期に差しかかっていると思う。

早稲田大学の菊池徹夫先生は、縄文の世界遺産の可能性について、およそ次のように言われた。

「地上に残っていない縄文遺跡の魅力をどうしたら世界の人々に分かってもらえるか？ それは、ひとえに、『生と死にまつわる祈りの場』として、縄文遺跡をどのように説明できるかにかかっている」

さらに、東京大学の辻誠一郎先生は、こんなふうにも言われた。

「縄文の価値を世界に説明する役割は、第一に、研究者が担わなければいけません。



今、土偶が熱い！（『縄文ファイル』最新号）

しかし、それだけでなく、一般市民がそれぞれの思いを込めて、アピールしていく必要があるのではないのでしょうか」

## 土偶パワー

去年から今年にかけて、ちょっとした土偶ブームが続いている。

きっかけは、去年、イギリス・ロンドンの大英博物館で開かれた「土偶展」だった。

「The Power of DOGU」と題したこの展覧会は、八万人の観客を集めた。



雪の三内丸山遺跡

その後、東京・上野の東京国立博物館で開催された「里帰り展」には、十二万人が駆けつけた。日本列島の各地から出土した土偶が、このように勢ぞろいして、一堂に会したのは初めてである。そこで、人々は、それぞれの地域に根差しながら、個性的で魅力的な表情をしている土偶に、改めて気づかされた。

たまたま、大英博物館の土偶展の仕掛け人の一人であるセインズベリー日本藝術研究所の所長のニコル女史と副所長のサイモンさんにお会いし、何度か親しくお話を伺

うことができた。

お二人が、縄文の土偶に着目した主な理由は、二つあるという。

一つは、その「小さな世界」である。手のひらに乗せられるか、せいぜい手で持てるくらいの小さな土偶の数々。そこに、人々を引きつける何かがある。ひよつとしたら、お守りなのか、あるいは身代わりの人形なのか。さまざまに想像力を刺激させられる。

もう一つの理由は、「共存」。実は、セインズベリー日本藝術研究所では、今年六月から、日本の土偶と、バルカン半島で出土した土偶の比較展を計画しているという。

コソボなど紛争の続いたバルカン半島から魅力的な数多くの土偶が出土している。それは、戦争で疲弊した人々の心を立ち直らせ、お互いの共存のシンボルとなり得るものだというのである。

ここに、セインズベリー日本藝術研究所のニコルさんやサイモンさんの発想の新鮮さと、それを運動にまとも上げるたくましさがある。

お二人のお話から、私たちに感じたこと――。

土偶というものが、現代人に多くのこと

を語りかける、実に貴重な存在であるということである。

私たちは、まだまだ、土偶の持っている魅力、言い換えれば、土偶パワーの可能性を知らなかったようである。これからの世界遺産を目指す運動においても、また縄文の市民運動においても、土偶が大きな働きをしてくれるのではないだろうか。いわば、土偶こそ縄文の文化大使と言えそうだ。

縄文発信の会が発足してから十五年目の春、そんな思いを抱きながら、新しい一歩を踏み出そうと考えている。

今、日本と世界は、先の見えない霧の中にある。しかし、人間は、どんな時代にも、夢を持たないと生きていけない。重苦しい時代だからこそ、胸を張って、世界に縄文の魅力を発信していきたいものである。

それこそが、二〇世紀末に出現した三内丸山遺跡からのメッセージであり、今、日本列島の文化の底力が、試される時だと思ふ。

(きくち まさひろ)

〈問い合わせ先〉

NPO法人 三内丸山縄文発信の会

TEL・017(773) 3477

# 「平成の大合併」後

## ——合併せずに生きる過疎自治体の観光・交流事業のあり方

財団法人日本交通公社

旅の図書館 副館長

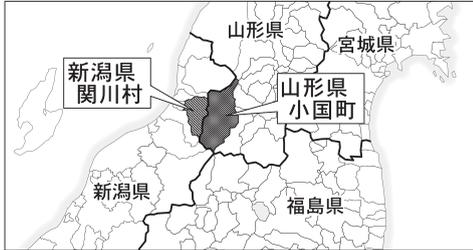
朝倉 はるみ

### 平成の大合併

人口減少・少子高齢化等の社会経済情勢の変化や地方分権の担い手となる基礎自治体（市町村）にふさわしい財政基盤の強化を目的として一九九九年に始まった「平成の大合併」は、合併特例法が期限

を迎えた二〇一〇年三月をもって一段落しました（注1）。一九九九年三月末に三、三三二あった市町村は、二〇一〇年三月末には一、七二七となり、ほぼ半減しました。しかしながら、市町村合併を

図1 小国町と関川村



しなかった市町村もあります。

今回は、合併を見送った山形県小国町と新潟県関川村という二つの過疎町村を例に、「外の人」を活用した観光・交流事業のあり方について考えます。

### 山形県小国町

MICEと森林セラピー基地で  
交流人口増加を目指す

小国町はJR米沢駅から米坂線で一時間半、山形県南西部、新潟県との県境に位置します。東京二十三区ほどもある広大な町は豪雪地帯であり過疎化が深刻であるにもかかわらず、今回は合併を見送ることとなったので、その理由を小野精一町長に伺ってみました。

小国町は、「昭和の大合併」の際に一町三村が合併しています（一九五四、一九六〇年）。このエリアは「小国郷」と呼ばれる生活圏として明治

時代以降まとまっており、今回の合併によって

新しい生活圏を構築する意義が少なかったこと、豪雪地帯かつ過疎地域という地元の現状に沿った行政サービスは合併しては提供できなくなる可能性があること、等が合併を見送った理由とことです。合併見送りは二〇〇三年六月に発表されました。その後も県から強い合併指導があったそうですが、小国町を含む置賜エリア全体では二〇〇八年六月、「合併せず」との最終結論を出しました。

小国町では、一九九八年から十カ年を計画期間とする第三次総合計画基本構想の目標として、「人口二万人台の確保」を掲げ、各種施策を展開してきましたが、計画期間内の二〇〇五年の国勢調査で人口が一人を下回りました。そのため、二〇〇九年三月に新たに策定した「第四次小国町総合計画基本構想」（以下、基本構想）においては、まちづくりの理念に、町民の主体的

な力と多様な「協働と交流と連携」による力の結集を据えるとともに、まちづくりの基本姿勢の一つに「多様な形で人の誘致と交流促進」を掲げ、シンポジウム、森林セラピー事業、体験ツアーといった方法で「町外の人」の誘致や交流事業に取り組んでいます。

前述した基本構想策定以前からも、小国町では毎年五回程度シンポジウム等を開催しています。『観光文化』198号(二〇〇九年十一月発行)のこのコーナーで「MICE(注2)」を取り上げましたが、小国町でのシンポジウムはまさしくMICEで、過疎地であっても「小国町ならではのテーマ」を設定することで町内外の人を集めています。例えば、二〇〇七年度は「飯豊連峰保全シンポジウム」、〇八年度は「森林セラピーシンポジウム」、〇九年度は「新しい『過疎』の姿を探るシンポジウム」「地域の連携による越後米沢街道十三峠シンポジウム」等です。いずれも参加者は百五十人



09年度に小国町で開催されたシンポジウムの際の地元の雑穀を使った弁当



森林セラピー基地「ブナの森温身平」(写真提供:小国町)

前後と規模は大きいとは言えません。しかし、「新しい『過疎』の姿を探るシンポジウム」には遠方の過疎地からの参加もあり、過疎地相互で来訪し合い交流を深めています。また、一泊二日の日程なので、参加者の宿泊代、懇親会代(飲食費、会場費等)、昼食代等の経済効果が地元が発生します。廃校になった小中学校を会場とするなど、既存施設の活用にもMICEは貢献しているのです。

小国町の交流促進事業のもう一つの柱は、森林セラピーです。町南部の「ブナの森温身平」が二〇〇六年四月に日本で初めての森林セラピー基地に認定されたことから、シンポジウムのプログラムにも森林セラピー体験を組み込んだり、独自のイベントを実施しています。森林セラピーの成果測定方法は、唾液測定や血液検

査等それぞれの基地によって異なります。小国町では、こうした医学的な方法はとらず、参加者が五感で森を感じるこそセラピー、つまり癒やしであると考え、森林アテンド(ガイド)を町民が自主的に育成し、森林体験を支援しています。温身平は、小国町への旅行動機として定着しつつあり、認知度も向上しており、森林セラピー基地への推定入込者数は二〇〇七年度五、一五〇人、〇八年度五、七五〇人、〇九年度七、二五〇人と、確実に増加しています。森林セラピー以外にも観光目的での交流事業として四季折々の体験ツアーを用意し、県外からの参加者を集めています。

## 新潟県関川村

### 学生ボランティアとの交流を継続

関川村は小国町の西側に位置し、新潟駅からは坂町駅経由で約一時間ほどです。豪農の館として知られる国の重要文化財「渡辺邸」ほか一八世紀の町並みが残る米沢街道、えちごせきかわ温泉郷があり、二〇〇九年度は約六十二万人の観光客が訪れています。

関川村も雪国の過疎地ですが、二〇〇三年三月に合併見送りを決めていますので、その経緯を平田大六村長に伺いました。

関川村を含む七市町村は、岩船地域広域事務組合を土台として二〇〇二年四月に合併推進協議会（任意協議会）を設置し、合併に向けた取り組みを進めていました。しかしながら、理想的な市をつくる議論、つまり広域的な将来ビジョンについての議論が十分行われず、合併の形や新市の名称、役場の位置、合併の時期といったことばかりが議論されてきました。また、合併後の国の政策があいまいであったことも村長が合併を見送った理由の一つだそうです。

議会の特別委員会も、合併しても財政問題は解決せず、過疎化の進展や住民サービスの後退が懸念されることから、やはり合併は時期尚早と判断したのです。なお、関川村周辺の五市町村は二〇〇八年四月に村上市として合併しています。

合併見送りを決めた翌年の二〇〇四年、関川村は国際ボランティア学生協会（IVUSA／注3）との交流を始めました。IVUSAは、学生から「夢企画」というアイデア募集をしており、関川村と隣の胎内市（旧中条町）出身の学生メンバーが「自分たちの故郷のお祭りを盛り上げたい、村を活性化させたい、東京の学生たちに田舎や祭りを体験させたい」という主旨の提案を行ったことがきっかけです。ほぼ飛び

込みのような形で学生から村に「祭り（大したもん蛇まつり注4）に参加したい」という申し出があり、村長が即座にOK。その数週間後の祭りには、約四十人の学生が参加しました。

二〇〇五年春には役場内の若手・独身の職員をIVUSA担当に任命し、学生の受け入れ態勢を整えました。この担当設置も村長のアイデアで、若手職員が企画力や人を動かす力をつけるための勉強になるだろうというのが目的です。

IVUSAにも、地域での出会いや交流、さまざまな体験から学生に社会人としての基礎力を高めさせたいという意向があり、関川村の祭りに参加することはIVUSAの学生にもメリットがあるのです。二〇〇五年以降、祭りへの学生参加者数は増加傾向

にあり、ここ数年は百人前後の学生が祭りの準備を含めて四日間村に滞在しています。

来村時に交わすあいさつ



関川村の「大したもん蛇まつり」で村人と一緒に大蛇を担ぐIVUSAの学生たち

は、「お帰りなさい（村長）」「ただいま（学生）」となりました。こうした信頼関係が築かれたことで、これまでIVUSAの学生に村で何をしてもらうか、村の担当で考え、準備をしていましたが、最近ではIVUSAからの提案も多く、それを取り入れた活動が行われています。しかしながら、IVUSAの受け入れも二〇一〇年で七年目を迎えることから、彼らを受け入れる意義や可能性について、しっかりとした村の姿勢を示す時期にきています。例えば、夏の祭りに行政が窓口になって学生が参加するということだけでなく、村民と直接触れ合う機会を多くし、「学生だからできること」について創造するようになってきました。二〇〇九年からは冬の「おいし・どもんこ祭り」にも参加してもらっているのですが、一泊でイベントに参加するだけだった予定を二〇一〇年からは二泊にしてもらい、準備の段階から



さいたま市緑区区民まつりで関川村の物販の手伝いをするIVUSAの学生たち  
（写真提供：関川村）

協力をしてもらって、村民とも交流を深めてもらっています。また、自炊が滞在の基本でしたが、一泊は旅館に泊まってもらうことで、温泉という村の魅力を伝えることができるようになりました。学生もリピーターが多く、できるだけ村内で食料品や土産物を買うといった心遣いも見られるようになったそうです。

祭りへの参加以外にも、村をフィールドとした学生の力を活用できる場がないか、それはこれからの検討課題なのです。もちろん、学生が村に滞在する意義は経済効果だけではなく、学生と村民との交流が双方にとって大変魅力のあることであることは間違いなく、学生の中には大学卒業後も祭りの手伝いに来る人もいて、学生と村人との交流は長く続いています。

また、関川村はさいたま市とも交流があり、同市の祭りでもIVUSAの学生は村人の代わりに大蛇を担いだり、村のブースで特産品の販売を手伝うなど、村のPRにも協力しています。村としては、村から大人数で出向く必要がなく、普通ならできないことも学生の力で可能になっているのです。

## 非合併自治体による「外の人」の活用

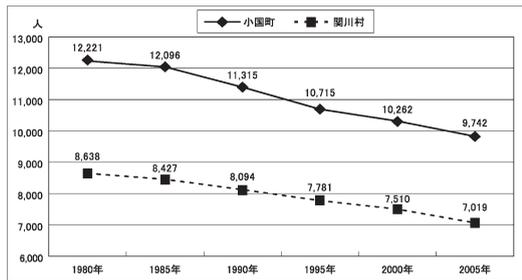
今回取り上げた小国町と関川村は、図2のよ

うに、人口減少が止まりません。今年二〇一〇年は国勢調査の年ですが、両町村とも五年前より人口が五百人程度減少するものと想定しています。人口減少のなかでも、「外の人」を巻き込み、その力をいかにうまく活用するかが大変重要な地域の戦略となっているのです。

有名観光地でもなく、山奥にあつて行きづらい過疎地であっても、過疎地なりの魅力—小国町であれば森林セラピー基地に認定された希有なブナの森等—を地元が認識し、それを「外の人」に知らしめる努力をすること、また、何らかの「人脈」—関川村は村出身の学生の「思い」が祭り支援のきっかけで使った—で交流の継続も可能となります。

また、関川村のように、組織と組織（村とIVUSA）の関係であること、さ

図2 小国町と関川村の人口の推移



資料: 国勢調査

らに行政のバックアップ体制が整っていることも、「外の人」との交流継続には有効と言えるでしょう。

(あさくら はるみ)

注1: 二〇一〇年三月末に国は合併特例法を改正し、今後は自治体の自主的な合併を促すこととなった(十年間の時限立法)。

注2: MICE(マイス)とは、会議(Meeting)、企業の行う報奨・研修旅行(Incentive Travel)、大型国際会議(Convention)、イベント・展示会・見本市(Event/Exhibition)の、英語の頭文字を組み合わせた言葉で、「明確な目的を持った、関心を同じくする人々が集まり、交流すること」。

注3: IVUSA(イビューサ)は、国際ボランティア学生協会(International Volunteer University Student Association)の頭文字を取ったもの。一九九三年活動開始。ボランティア活動、緊急時対応や救急法などのトレーニング、合宿・研修会・講演会・情報発信等の基本的な組織マネジメントの実践の場を提供することによって社会に貢献できる人材を輩出することにも、多様な社会のニーズに応えることのできる組織力のある団体を目指している。過去十七年間の活動参加は約五百二十大学、約二万七千人。

注4: 村で毎年八月に行われる「大したもん蛇まつり」。一九六七年八月二十八日に発生した羽越大水害と、村に伝わる「大里峠」という大蛇伝説をテーマに村民が一九八八年に作った大蛇パレードに登場する長さ八二・八メートル、重さ二トンの大蛇は村民の手作りで、「竹とワラで作った世界一長い蛇」としてギネスブックに認定されている。

# 「旅は世につれ」

前編では、池内紀、山口由美、両氏の旅とのかかわりから始まって、海外旅行自由化当時に日本人旅行者の置かれていた状況、海外事情へと話が展開。さらにお二人の豊富な旅体験を踏まえて、旅に出る理由、旅の本来の意味を探りました。話は広がり、海外では秘境のエコツーリズム、国内ではふるさとたるべき地方の厳しい姿が話題となりました。

## 旅の持ち物

**外川** 我々シニア世代にとっては、男の一人旅というのはある意味憧れで、池内さんはいろいろな所に行かれています、一人旅を楽しむコツというのは。

**池内** よく一人旅というと、ぶらつとあてもなく出かけるのが中高年の夢みたいに言われていますが、あれは誤解で、ぶらりと旅に出るためには日頃からいろいろと準備をしているんですね。

旅をソフトとハードに分ければ、ハードは旅の道具でしょうか。僕は黒いリュックが唯一の旅の道具です。その中に旅行に必要な傘とか水筒とか薬とか、お金は普段使っているのと別の財布に入れて、洗面セットなんかも全部きれいに整理して入れてるん

です。だから、下着をひとそろい入れれば、直ちに旅立ちができます。

それから自分のいでたち。今も着ている安物のジャケットとジーンズとウオーキングシューズ、これは、体で言えば第二の皮膚なんですね。旅の皮膚であり、体にぴったり合っていないと、ふらりとは出られないんですね。そういうのを一から、あれ入れてこれ入れて「お母さんどう思う？」なんてやってたら、荷物が多くなつて、さて出かけようという、もう疲れてる(笑)。

ふらりと行くためには日頃の入念な準備が必要で、そういう旅のスタイルから始まって、ソフトはどこにどういう心づもりで行くか、一種の情報に当たるんですけど、それもパソコンでたたき出すじゃなくて、日頃から気をつけて、これは面白そうだな

という所を新聞や雑誌から切り取ったりコピーしたり、パンフレットを集めておいて地域別に分けておき、その地域に行く時にファイルからすぐに出せるようにしておく。要するに、自分でソフトを作っていく、旅は自分で作るものです。

ソフトを自分で作っている間に心が旅立って、かなり旅行気分になっていく。それがまた楽しい。でも情報というのは非常に危険ですよ。現在はホテルの何階からどういう景色が見えるか、お風呂がどんなで、食事が何品出るか、ネットで全部分かるでしょう。それは旅の楽しさを消してしまう。そういう情報を身につけて行くと、食事に不満をいだいたり、単なる情報を確かめているだけになってしまいますから。

ぶらりと行くためには「未知」がないと。

未知の楽しみというか、今言ったソフトの集め方は自分の手の届く範囲で、それ以上は求めない、それは旅先で体験することだから。十年くらい前の古いガイドブックに

旅館のリストなんかがついているでしょ、「日本交通公社の協定旅館」とか。僕は今までに愛用していますよ。電話すると「現在使われておりません」ということも結構あるんですよね。この宿やめたんだな

あ、と、それがまず面白い。電話がかかると、今もちゃんと営業してるってことは、十年間きちんとやってきたんだなと、そこで信用できる。それに電話の対応の人の口調でどういう宿かなというのほぼ分かる。

行く前から旅立っていて、しかも自分の旅のイメージが出来上がっていますから、それを修正したり訂正しながら、旅は絶えず変化しながら作っていくものです。一人旅の面白さは、それが一人でできますから、こたえられない。ただ、さつきも言いました、ぶらりとあてもなく旅をするためには、やはり入念な日頃の研鑽が要るんです。

外川 いつでもそういう準備ができていて、あたかも隣の町

へ行くような感じで、すつと行かれていきますよね。

池内 その方が楽ですしね。僕はまったく同じ黒いリュックサックを二つ持ってるんです。今日持ってきたのは町歩き用なんです。もう一つは少し長い旅行用。同じ時に買ったんですけど、旅行の方が頻度が少ないからくたびれが少ない。ハートマンというアメリカの製品で、この黒いリュックで夏のヨーロッパにひと月いたこともありますよ。口が大きく開いて非常に使い勝手がいいんですね。中には登山用のカラビナを付けて、いろんなものをぶら下げて。

山口 バッグを替えると忘れ物しますよね。池内 いつも透明なファイルが入っていて、そこに入れてある物のリストがあるんです。



池内氏愛用の黒いリュック



それで、出かける前に持ち物の出席をとる(笑)。「胃薬」、「ハイ」と自分で返事をする(笑)。青い字でしるしのあるのは、一度宿に入ってから町を散策する時に持っていく物です。

**山口** ああ、これも大切ですよ。慌てて入れ替えたりすると忘れますものね。これは気づかなかった。

**池内** 出かける時に肝心なものを忘れるといけないし、余計なものを持っていくのも無意味だし。それを何度も何度も体験して、リストを作りました。自分のスタイルを作っ  
て自分で選び取らないと。『地球の歩き方』の最後に持っていくものとか書いてありますけど、あれはまあながめるぐらいで……。

**山口** 自分にとって大事なものと皆さんにとって大事なものは違いますものね。

**池内** そう、だから旅は作るものだ、自分で作らないといけない。

**渡邊** でも図書館に「何持ってたらいいんでしょ」って問い合わせも来るんですよ。

**池内** 僕のところにも往復はがきで聞いてくる人がいます(笑)。「先生の本を熟読しました。靴はこの靴ですか」と。自分で

見つけることと書いてあるのに。

**外川** 山口さんの場合は、旅行の準備段階で情報はどうやって集めていらっしやるのですか？ 最近はインターネットという手段がありますが、こういった辺境の地を旅されるにあたっていかがですか。

**山口** 私は池内さんの域には達してなくて、試行錯誤の過程にあるんですけど、恐らく秘境の旅の方がノウハウが確立されているみたいで、先進国に行く時の方が荷造りに悩みますね。女性ってそういうところありますよね。何を着たらいいか、靴は？とか。でも、秘境ほどの写真もいつも同じもの着てると思うんですけど(笑)、大体決まってるんですね。持っていくのは手持ちのリュックと、キャスターにもなり取っ手で持てるんです。セスナにはかり乗るのでこれなんです。ちよつと何か出すという時に、スーツケースだと開けるとスペースをとるけど、ファスナーを開ければぱつと取り出せるし、バッグ自体が軽いので、相当お土産なども詰め込むことができます。これはパタゴニアの製品なんですけど、秘境用にはこれですね。

**外川** 秘境だと相当重装備で、と思いますか……。

**山口** と思われるんですが、「ああ今度はパプアニューギニアだから気にせずふらりと行けばいい」、「でも今度はフランスだから準備が大変」という感じで。先進国の旅はまだ確立されたものがないので、その場合、季節によっても着るものについてはすごく考えちゃって。

**池内** 女性はそうですね。とくに着るものとか。

**山口** ええ、だから秘境は楽なんです。まさに誰も見てないですから。「お前、昨日も同じシャツ着てたな」なんて言われることもないし。着るものも、長年の経験でこれは汚れても洗うとすぐ乾くとか、着やすいとか、水にもほこりにも強いとか、そういう経験値を積み重ねてきた、さっきの池内さんの持ち物リストに近いものが頭の中にあって、それをこのバッグに詰めれば秘境にはすぐに出発できるんですね。

**池内** 小さな袋物っていうんですか、今はものすごくいいのがあってね(小さな袋を取り出し)、いろいろ小物を小分けして、例えばこれは町歩き用のリュックですけど、



バブアニューギニアの旅装備。右後ろ後方にあるのが秘境用のバッグ

小さな果物ナイフとか入ってて。リンゴを買って食べたいて時にすぐに皮をむけるように、ちゃんとフォークも入ってる。フォークで食べないとおいしくないから(笑)。こ

ういう小さい袋を五つくらい用意すれば、大体、旅行に必要な物はすべて収納できて、例えばスーツケースの中でも、袋がいくつか入っている状態が一番整理しやすいんでしょうね。

今は、こういういい小道具が、たくさんあるから。僕なんか、それが面白くてしょうがない。いろんなものを買って面白がってますけどね。要するに旅の支度自体が旅の始まりで、それを楽しまないとね。普段からこれは役に立つか、という目で探してますしね。百円ショップなんて宝の山ですよ。僕は眼鏡をよくなくす危険があるから、リュックに必ず予備が入っていて、最近は何だよね、予備の予備まで入れている(笑)。

**山口** でも、そのバックアップするとう感覚は分かれます。私も、大きな荷物と手持ちの荷物の両方に絶対

必要な物は入れてないと安心できない。

**池内** そうそう。そこまで用心すると、なくさないんですよ。不思議にね。僕は旅というのは、人間がどれだけ少ない物で過ごせるか、生きられるかの実験だという気持ちが強いですよね。日常をしょって行くんじゃない、道具に関しては、その何日間かは最低これだけで過ぐすと。なかったら向こうで買おうなんていいますが、あれは一番旅では下手なんですよね。

**山口** 現地で買えばいいとかガイドブックに書いてあるけど、コンパクトじゃなかったりするんですよ。

**池内** そうそう。それに探している当ものがなかなか手に入らない。

**山口** 気に入ったものがなかったり、意外と選ぶのに時間がかかって、結局旅の用具をそろえるので一日かかっちゃったり。

**池内** だいたい小道具は何にでも転用できるんですよ。例えばフォークの端っこで耳かきの代わりにしたりすれば、耳かきを持つていなくてもいいわけで(笑)。使う知恵さえあれば。一つが五役くらい果たすわけですよ。旅っていうのはそういう知恵比べで、世の中で処していく知恵を僕は

旅から学びました。

**外川** そういった意味では、今いろいろ便利なものが出てきて、旅がしやすくなったっていうのはありますね。

**山口** 特に日本製は素晴らしいですね。よく海外でみんなに自慢をします(笑)。

**外川** ですから、海外から来た人たちに日本の百円ショップが大人気という。

**池内** 僕はふだんはほとんど物を買わない人間ですが、レモン搾り器が好きで、いろんな国で買いました。ドイツ、オランダ、オーストリア、チェコ、ロシア、ポーランド……全部家にありますが、日本製が一番使いやすい。搾る時にどこに当たって、どういう形で搾り取れるか、実に上手に工夫してある。フランス製のものがかっこよくて、いかにも工夫してあるみたいに見えるけど、搾りにくい。小道具に関しては日本人は素晴らしいですね。

**山口** あと、日本製はコンパクトですよ。例えば虫よけスプレーなんかも、日本製が一番小さくて、持っていきやすい。向こうで買うと、とんでもなく大きかったり。

**池内** あまりにもよくできているから普段気がつかないだけで、日本製はほんとに素

晴らしいです。だから、そんなに素晴らしいものをつくり出す国民が行くんですから、海外に行けば逆に不便なはずなんです。最低限いい道具を持っていけば逆にもどの国でも通用する、ということなんです。

**山口** でも、私はどちらかというと、旅行者として技術はあまり上達してないかもしれない(笑)。インタビューなどで聞かれたりするのはすんで、さぞかしこのバッグの中には秘密があるんでしょうね、と。でもそんなに言えるようなものはなかったりして。

**池内** 僕は両手がふさがつてると嫌なんです。常に両手が空いてないと。物を買って紙袋持つのも嫌で。

**山口** ちょっと聞いたことがあるんですが、旅を重ねると男の旅の達人は荷物が減っていく、ただ女の旅の達人は逆に荷物が増えていくと。私の知り合いの世界各地を旅している写真家は、機材はそんなに持ってないけど、その代わりいろんな物持ってますよ。アロマオイルがいきなり出てきたり。

**外川** やっぱり男と女では、旅に求めるものが違うのかもしれないですね。

**山口** 女性は最小限の中でもおしゃれをし

ようとやるから。そういう意味で、私はあんまり確立されてなくて、唯一楽なのが秘境に行く時……。

**池内** 僕は観光地のお土産にはほとんど関心がありません。食べ物も、その土地の人が食べてるものをいただきます。

**山口** 食べ物を持つていけないですね。梅干しもしようゆも。

**池内** お腹さえすいていけば、向こうの人が食べるのが一番おいしい。

**外川** その風土で育ってきたものですから、本来それが一番いいはずなんです。

**山口** でも確かに、レトルトのおかゆとかいっぱい抱えて旅されてる方がいますよ。

**池内** チロルで隣の人がそうめん食べて、なんでこんな所でそうめん食べてんだってフシギでした(笑)。

**山口** いいもの持つてきましてね、っていうので何かと思ったら、ようかんを持ってきた人がいて、ギアナ高地でようかん食べたんです(笑)。でも、合わないんですよ。ギアナ高地とようかんは何か合わない。

**池内** パリだって水とか空気が違うから、ようかん食べて渋茶飲んでおいしかった、とはならない。その土地土地の人々の食が一

番基本ですからね。それさえ食べて、みんなが食べてる風景を見て、普通の人が行く食堂へ行くと、自分にとっては珍しいものを食べる楽しみと土地の人が食べているのを見る楽しみがある。

**外川** 若い時は消化能力も高いんですが、年齢とともに下がってきてしまいませんか。

**池内** その点、アルコール党はラクですね。「このアルコールに合う安くて旨いもの」って頼めばいいんですよ。お酒を飲むと、ゆっくり時間をかけるでしょ。だから、いろんな人が見られて、観察できますし、同じ店に二回続けて行ったりすると、相手は大喜びしますからね。

## 旅のスタイル

**外川** お二人は旅が生活の一部で、日々あちこちご旅行されています。旅にもいろんな旅があると思うんですが、連載を拝読して感じるのは、自分の好きな土地とかそういう所があつて、繰り返し行って、自分の家に戻るような感覚を持たれている時があるように思います。いかがですか。

**山口** 最初に、山口正造が南方が好きだったという話をしたんですが、それと似てい

て、私は南の方の国、熱帯にそういうことを感じます。熱帯の空気ってあるじゃないですか。日本の夏とも違う、もわーっとして植物の匂いがするよな、その空気を感じると「ああ、帰ってきた」と感じる。

**外川** 確かに独特の感じですよ。

**池内** ああいった所で哲学書読もうなんて思わないですね。

**山口** 全身が解放される感じというか……。だから、さつき旅は逃避という話をしたんですけど、南方の旅っていうのは、現場ではあまり難しいことは考えず、解放されるんですよ。それは、日常の生活の中でごく心地よい逃避なんですよ。

**外川** 分かります。あの解放感はまったく違いますね。

**池内** 海外でも国内でも、旅っていうのは一種の避難所、アジールっていいんですが、自分の避難所を三方所くらい見つけておくと、年とっても楽ですよってよく言うんです。あちこち違う所に旅するのもいいけれど、その中で徐々に、何度も行ってもいいなという場所を選び、そこにある宿と顔なじみになって、第二、第三の自分の避難所を作っておくと、そこへ行けば自分の家と

は違うんだけど親しいし、見知らぬ人なんだけどこちらをよく知ってくれてるし、その周辺は未知ですから、そこからいくだけでもまた旅ができる。三方所あればいいんじゃないですか。じゃあ、池内さんはどこ？と言われますけど、そんなの教えられませんか（笑）。自分で見つけてください、と。

そういう所は、あまり発展しない方がいいですよ。自分の記憶にあるのとはほぼ変わらない形ですとある、そういう方が避難所になりますよ。だから、あんまりやる気のある旅館やホテルは駄目で、そこそこに、つぶれない程度に頑張ってるくらいがいい。

**外川** 確かに、長いこと続いているってことは、やっぱり何かあるんですよ。居心地の良さがなかったら、来てくれないでしょうし。

**池内** リピーター、常連さんができている所ですね。だからガイドブックは古いほどよろしい（笑）。使いこなす知恵がないと駄目ですけどね。

**外川** やはり、その土地が好きで繰り返し来てくれる、そういうお客さんがその土地にとって一番大事でしょうし、旅行する

側にとつても非常に心のよりどころになる部分があつて、関係が長く続くというのがありますね。

**池内** それは年代にもよりますけどね。若い時は、あちこち行つていろんな体験する方がいいと思いますが、ある年代からは自分の避難所探しの旅もいいんじゃないかと思ひます。

**外川** ずっと気になつていたのは、旅に行くだけじゃなくそれを記録に残しておくとか、そういったことも大事なと思うんですね。後で読み返した時に、ということもあるでしょうし。お二人の場合は旅行中にメモをとつたりはされてるんですか？

**山口** 私は基本的には固有名詞や数字以外は書き留めません。ただ、パソコンを通常持ち歩いているので、三日に一回とか、あるいはものすごく印象的な出会いがあつた時に、その時のリアルな感じを誰かにメールを送る感じで記録します。本当に送るケースもあります。話題を共有している人だったりすると、こんな人に会つてね、とか。それは自分にとつての記録にもなつて、結果として旅のメモになる。

**池内** 僕は今はデジタルカメラを使つてま

すけど、以前はフィルムカメラで、現地に着いたら駅から始まつて要所要所で撮つて、それを現像すると一回の旅で大体フィルム三本くらいになります。メモするのが面倒な時は説明を撮つたり。

**山口** 私もメモ代わりにデジタルカメラで撮りま

**池内** 文字が読み取れないものも、撮つておいて誰かに読んでもらうとか。現像して、移動した順にアルバムに入れていく。アルバムといつてもすごく薄くて安い百円くらいのものね。開けばそのコースを歩いているように写真が連なつている構成にしたのを、何年何月、と表紙に書いて。たくさんあるんですが、北海道、東北などエリア別に分けてます。

最近ではデジタルカメラを愛用してましてね。例えばこの間、岐阜県が多治見という焼き物の町に行つたんですけど、その時は観光商工課が作ったような町の地図と見どころが入つてる案内図とか、市役所にある人口の推移を示した看板や窓口風景も撮つて。そうすると町の軸ができるでしょ。これはデジタルカメラの威力ですね。

あとは町のなんとか銀座、という通りと

か。かつては町の中心で、今は寂れて地形的に今の時代に合わなくなつた所と、逆に今、町が非常に力を入れて、まちづくりをしているような所を撮つたり。多治見では古い街道を再生していて、かなりよくできています。もともとあつたものにかなり手を加えています。例えば、蔵を生かそうとしてるんですが、同じものを四通りくらいの角度で撮つておくと多治見独特の蔵の型がよく分かるんですね。その土地の古い建物が分かるよう、自分で作った情報ですよ。

あとは、面白い建物があるから撮るとか、焼き物の博物館に行つて、おちよこをアツプで撮つたり。お酒入れたらヌードが見えるつて（笑）、そんなのがあるだろうと思つて探したらあつたんで。僕は非常にメカに弱いんだけど、デジタルカメラはいつも持ち歩いてます。

**外川** デジタルカメラがメモ代わりみたいなものなんですね。

**池内** 完全にそうですね。これだけの大きさですべてが収納できるんですから、見事なものですよ。あんまり高い機種だと性能が良すぎて使いこなせない。だから、僕

は誰でも使えるというコンパクトカメラで、何に使うんですかと聞かれたから、「スカートのの中を撮るんです」と言ったら、そんなことしちゃ駄目ですと言うので、いや、それほど簡単なものを欲しいと（笑）。旅行する人間からすると非常に楽になりましたね。

**山口** デジカメだとフィルムがないから、その分、ほんとに荷物が楽になりましたね。

**池内** それにデジカメは、ホテルとか列車待ちの暇な時に再生できるでしょ。文字なんか大きくして、時間つぶしに再現して、面白いところはメモしたりして。再生しながら、さりげなく列車の中できれいな人撮ったりして（笑）。

**外川** そう考えるとデジカメはすごいですよ。海外旅行の初めのころは、フィルムを何十本も持っていつて。フィルムだけは日本が安かったんですよ。海外で買うと大変だったというんで。

**池内** 僕は旅行から帰ると、ちよつと立派な手帳、ハードカバーのしっかりした厚いものですが、ドイツ語で旅の本と名付けて記録をしています。色刷りの表紙があつて、そこに日付と、どこに行つてどういう宿に

泊まったか、大体のコースをメモしておくです。そうすると、年間に何回旅行したかがまず分かるし、それぞれの宿について、ドイツ語で良くない、いい、とつてもいいと印を付けて、それを後から読むとここはもう一度泊まってもいいなとか。電話番号もちゃんと書いてあるのですね。そういう手帳がずいぶんあります。

**渡邊** いつも頂くスケッチはどうやって……。

**池内** あれは、デジカメで撮った写真をもとに、帰つてから描いています。宿で退屈な時にも描いたりしますけど。スケッチブックなんかは持っていきませんね。持っていくのは小さな手帳だけです。

**山口** メモ帳はいつも手になじんだ同じものを使いますね。私はビニールコーティングしてあるものを買います。でないと、雨などで摩耗してしまつたので。

**池内** やはり自分の方法、自分のスタイルで記録にしておいた方が、旅は面白いですよ。海外なんかは大体一回の旅行に小さなノートを一冊充てて、表紙を見ればロシア旅行とかポーランド旅行とかカット付きで書いてある。泊まるホテルの名称やパスポート番号も全部書き留めて。海外に行く

時は、用意する物の一つにそういった手帳がありますね。

日本ではそういうものは必要ないけれど、メモする時に、その土地のおばあさんがしゃべっているような言葉、特に語尾は面白いからメモしますね。さすがにデジカメでは言葉は再生できないから。

**山口** 私は海外が多いから、土地の名前とか人の名前とか、固有名詞は相手に書かせるんですよ。それで書かせた後に、相手に言わせるんです。それでどう読むかカタカナで書いておく。

## 行きたい国、したい旅

**外川** それぞれ連載の方は国内と海外をベースに続いているんですけども、今後これから行きたい場所などはありますか？

**山口** 行きたい場所はたくさんあります。すごく小さいころから行きたいと思つていて、憧れながら行っていない国の一つにブータンがありますね。あまりに思っているせいか、これは生半可なことでは行つてはいけないんじゃないかと思うようになって、そうしたら余計に行けなくなつてしまいました。

池内 プータンは昔は本当に鎖国状態でしたものね。今は割と行かれてるようですね。

山口 別に行くことはそんなに難しくはないんですが……。実は、私の旅の原点というか、お恥ずかしいんですが、これは高校二年の時のレポートで、プータンのことを調べて書いているんですね。高校の地理の時間に何でもいから好きな国のことを書きなさいって言われて、プータンのことを書くこと。恐らく、小さいころから秘境志向があった表れだと思っんです。

池内 もともとは何かで見つけたんですね。

山口 ええ、『あるくみるきく』で。

池内 中尾佐助さんなんかが最初に行って、その後に民俗学者の人がよく行ってましたね。(レポートを見ながら) ああ、着物の絵も書いてある。

山口 私が描いたんです。

池内 資料を見て、正確に描いてありますね。

山口 そのころは高校生だから当然、秘境旅行にも行ってなかったんですが、好きな国と言われた時に、なぜか他と比べること

もなく、迷うこともなく「ああ、プータン」って。テレビや本で知識はあったので。

秘境志向といえ、もう一つあって、中学のころに読んだ本で私が一番感銘を受けたのが本多勝一さんの『極限の民族』なんです。それを読んで感動してる女子中学生ってどうなのかというのはあるんだけど(笑)、いろいろな民族のことが書かれていて、イヌイットとパプアニューギニア高地人とベドウィンなんですが、読みながら、なぜか「ああ、イヌイットはきついな、無理かもしれない」と無意識のうちに考えていたんですね。誰にこの三民族の所に行けと言われてるわけでもないのに。それは裏を返せば、パプアニューギニアとベドウィンはすでに許容範囲内で、中学生の段階でOKと判断していたんでしょう。プータンは、そうした私の秘境志向の原点であるのに、まだ足を踏み



プータンについて書いた高校時代のレポート。秘境志向の原点である

入れずに来てしまった。早いうちに行かなければいけないと思っています。

池内 体もですが、精神的にも人間の骨格は、大体十代のころにほぼ出来上がってま

すよ。そこで無意識に仕入れたもの、何となく思っていることは、大体その方向に行きますね。

**外川** やはり可愛い子には旅をさせろ、ですね。

**池内** 僕のところはたまたま息子が二人でしたが、十代の時に自分で計画して、自分の好みで選び取った所に行く、それを何度かさせました。だから今は旅行に関しては何の恐れもないようです。明らかに山口さんは原点にこれがあったから、これほどごく自然体で旅行ができるんでしょうね。

**山口** このレポートは、大切に使っていたのではなく、たまたま出てきたんですね。

**池内** 大切ですよ。高校二年生でこういうものを書いていたっていうのはなかなか面白いデータです。

**山口** 確か、ロサンゼルスオリンピックで初めてブータンが出場したのかな。その時にもよくぞ出てきたなと（笑）、シンパシーを感じてしまった。だからやすやすと行けなくなってしまう。そういう意味では行くべき時を逸したというか。

**池内** 非常に大切な記憶、記憶の宝物みたいなになってますからね。

**外川** ハムレットみたいな心境ですね。

**山口** そうなんです。行こうか行くまいか。

**外川** ブータンも独特の文化を守っていくために、やはりエコツーリズムじゃないんですけれど、人数を抑え、ブータンが好きだという人に来てもらいたいという形でやっていますね。

**山口** 行つてないのに知識だけはあるんですけど（笑）、確か一人当たり一日二百ドルかかるんですよ。で、一人旅だとサーチャージがかかってさらに高くなる。なんで私、こんな情報ばかり集めているのか。でも、ある程度の価格を設定することで人数を抑えるのは、実はアフリカでもやっていて、ボツワナがそうなんです。ボツワナは値段を決めているわけではないんですけど、オカバンゴデルタという自然の豊かなところがあって、あえて高い値段のロッジを作らせています。一泊二、三百ドル以上くらいの設定で、自然にブータンと同じことをしているんです。それをする事で観光を産業として成り立たせながら、人数を減らすことで自然への負荷を減らすことができます。それ、それは恐らく、ブータンが最初にやったことではないかと。

**池内** 非常に深い知恵ですね。

**外川** ブータンは、国王が国の目標として、GNPならぬGNHというのを……。

**山口** そうです。国民総幸福量。

**池内** 楽しい言い方ですね。

**山口** 経済がどれだけ発展したかではなく、どれだけ国民が幸福感を感じられるかというのを大事にしていて、その幸福感のある国民の暮らしと共存する観光を、環境や住民の生活にストレスを与えない範囲でやりましたよ。

**外川** それは、訪れた旅行者も幸福感を得るし、暮らしている人もそういった人と触れ合つて幸福感を得るといふ、まさにいい共存関係ですよ。

**池内** 日本では新しく観光庁ができましたね。その時に朝日新聞にインタビューされたんです、何を期待するかと。今までIT立国と言っていたのが、今度は「観光立国」と、すべて経済の目で見えない、観光庁ができたのであれば、旅の哲学を説いてほしい、それをまず初めにやってほしい、何人外国人が来てどれだけの経済効果とか、そういうことはもういいから、ということ言った覚えがあります。

## まとめ

**外川** 旅の原点に返り、旅する側に立つてもう一度考え、旅の持っている素晴らしさをもう一度見つけ直したいということで、今回の座談会を開催させていただきました。これだけ便利になってくると、昔流の旅を求めるのは無理があるとしても、衣食住に加えて旅ではありませんが、やはり我々の人生を支えて行く上で旅の役割は相当大きいと考えます。お二人はいつお会いしてもエネルギーでお若くて、旅の恵みを享受されているのではないかと思います。

**山口** そうですね。私はうっかりすると旅をしているという感じ、気がつくとな旅をしているという感じで、多分無意識のうちに求めているものだと思います。さつき、逃避という話が出ていましたが、半分逃避の部分があるんですね。それは、とても困難な取材旅行であっても、旅に行ったら少なくともそのほかの仕事はしなくていい。こっちの原稿も書かなきゃ、あっちにも対応しなきゃということではなく、この旅だけでいい。そこに行くには情報を集める作業があつたり多少大変なこと

があつても、この場だけを楽しめばいい、というのはやっぱり解放感ですよね。その感覚が、物を書いたりする生活の中に定期的に入ることによって、いろんな意味でのバランスがとれているのかなと。

私はあまりシステムが確立されていない人間なので、先ほどの準備の話で、ああなるほどとか、あれは正しかったんだなどいろいろ思ったんですけど、日常においても、実は、いつか行く旅のために無意識のうちに情報を集めていたのだということにも改めて気づかされました。本屋さんに行つて本を選ぶ時も、いつかきつと行く旅に必要だから今買つておこう、という気持ちだと思ふし、インターネットでふつと気になったりというの、もちろん次の旅のために検索していることもあるけれども、いつか行く旅のために検索していることでもあつて、私も無意識のうちに次の旅への準備をしているのかもしれない。

あとは、旅のスタイルで言うと、私は行く前にすごく情報を集めるんですね。それは、歴史や文化からガイドブック的なものまであらゆる情報を集めるんだけど、現地に行ったらその情報は捨てることにしてる

んです。というのは、現場にいたことが一番だから。だから、事前にチェックした店に行くことにはこだわらない。だけど、チェックはしていくんです。それは、その町では例えばこのそば屋が有名だという情報があるとないとは違うから。でも、現場で絶対そこに行かなきゃっていうのではないですね。

**池内** また、そういう情報は忘れますよね。  
**山口** そうですね。気がつくとな全然違う店に行つてたり。

**池内** 僕はいつも、旅は第二の人生だという言い方をしている、自分の暮らしや生活は捨てられないけれど、旅という形でもう一つの人生を生きることが出来る。その中には十代の少年にもなれるし、三十代の壮年にもなれる。自分の暮らしの場を離れ、自分の時間と空間を自由に使つて旅ができるんですから、想像の中では青年が旅をしているもいいし、こんな自由な世界はないと思いますね。

**外川** 池内さんは、旅でご自身の記憶と対話されていると書かれていましたね。

**池内** 年寄りには記憶の量が膨大ですからね(笑)。



JR 只見線に乗って

**山口** じゃあ、どんどん楽しくなりますね。  
**池内** 記憶はキーを押さなくても一瞬に出  
 てきますからね。あの時、あの人はこんな  
 服着てこんな表情してたよな、とか。

**山口** 旅に行ったことで、普段忘れていた  
 過去を思い出すんですよ。  
**池内** 実に不思議なことを思い出しますね。  
**外川** やはりそれは、脳が活性化されるか  
 らでしょうね。

**池内** 日常の制約がなくなっ  
 た時に、脳は思いもかけない  
 連想を呼び起こしてくれま  
 すね。

**外川** やはりある程度未知  
 の所に入っていきますから、  
 知識だけではなく、五感を開  
 放しているんなものを体で受  
 け止めますよね。それが脳に  
 刺激を与えて。

**池内** でしょうね。

**山口** ボケ防止にもいいとい  
 う……（笑）。

**池内** それはそうですね。  
 やはり未知の場所って、どこ  
 か緊張してるんですよ。角を  
 曲がった先に何があるか分  
 らないですから、あれこれ想  
 像しますし、どこか緊張して  
 いるから、感覚が非常にさえ

てて、なんてことない看板が面白かったり、  
 なんてことない風景がやたら気に入ったり  
 する。全身で受け止める。

**山口** だから体にもいいんだと思います。

**池内** 旅から帰る時って悲しいでしょう。  
 僕なんか、家が近くになるにつれ、落ち込  
 んでね（笑）。でも「ただいま」と言った瞬  
 間に日常に戻り、それまでの旅がすーっと  
 消えていく。あの転換がまた、いいんだよね。  
 グループで旅をするのがあんまり好きじゃ  
 ないのは、自分がほんとに感じた五感が  
 邪魔されるから。

**山口** 大勢でいればいるほど、仲間同士の  
 コミュニケーションに気をとられちゃって、  
 肝心の旅とのコミュニケーションがどうして  
 も減っちゃうでしょう。

**池内** 「あの駅前のラーメン食ったけど……」  
 とか、どうして旅行中にそんな話をするの  
 か、横でされるとね。それは日常で移動し  
 ているだけになってしまっ。

**外川** 旅の魅力はやはりそこにありますよ  
 ね。全身の細胞が活性化するって感じがあ  
 りますものね。私は仕事の関係もあって昨  
 日、動物園巡りをしたんですよ。それで野  
 生のライオンやアムールタイガーと面会し

て、非常におののき、まさに野生に触れたんですが、動物たちが生まれた場所の写真があつて、アフリカのサバンナに動物が点在する写真を見ただけで、おーっという感動が生まれ、ほんとに実際に行ったら、人間本来の野生がよみがえってくるんじゃないかと思いました。

**山口** そういう大自然の中に行くと、人間というより、一生物としての自分を感じるというか。それは絶対、都会では感じられないですね。

**池内** 僕は最近近場で一泊して帰ったりしてますけど、この間は築地のアメリカ人がよく泊まるホテルに泊まりました。そうすると足代が要らない。遠くに旅をすると、飛行機とか新幹線でお金かかるでしょ。それがつらい方は、手近な所で、泊まったことのないホテルに夕方から泊まって、近所を回り歩いて、居酒屋でお酒を飲んで、翌朝はホテルで朝食をとると、何だか異国に来たようですよ。僕は東京一泊旅行と称して楽しんでますけど、遠方に旅しなくても、自分で遠方を作ればいいんですから。実際、身近な所はほとんどみんな知らないんですよ。隣町で、電車で二十分の所に一泊し

て帰っても、それでも解放感があつて新鮮な旅ができる。

**山口** 単に隣町や築地に何か用事があつて行くだけでは感覚が開かないんだけど、旅として泊まって、荷物を置いて宿を出ていく時に、多分、旅人になるスイッチが入るんだと思います。

**池内** 旅というのはいろんなやり方があつて、決して用意された旅だけではなく、自分の旅を見つけたいといつも思ってますね。アメリカ人が泊まるホテル、しかも中の下くらいね、ああいうのは面白いですよ。すごく大きなダブルベッドや揺り椅子があつて、床のじゅうたんがハデハデで、朝食の時間なんか夫婦連れや子供連れが、声をかけながら食べてる。

**山口** その旅を楽しんでる人たちを見るだけで楽しいんですよ。

**池内** アメリカ英語だからよく分からないけれど、子供をしかつたりしているのを見ると、その家のしつけ、ダンナの年収、デモクラシー、そういうのが全部分かる(笑)。

そういう旅もありますね。  
**外川** 今は日本にも世界中から人が来ていますからね。そういった視点から触れ合う

のも面白いですよ。

私は今年、高野山に行つたんですが、ミシュランで三つ星になつてるのでフランス人が多いんですね。グループもいましたが、個人で来てるんです。やはり向こうの人は旅慣れてますよね。

**山口** よく、どこかいとこありませんか、と聞かれたりしますが、やっぱり旅って自分で作って行くものっていうか、やはりツアーでできているものから探すというのは、本質的ではないような気がしますね。行きたい所って自然に出てくるもので、先ほどのお話にあつたように日頃の生活がいかに旅を前提にしているかではないでしょうか。

**池内** 勤勉であればあるほど旅は報われる、面白くなりますね。こんなに努力のしがいのあるものもないですよ。怠惰な旅では、やはり怠惰な体験しかできないという気がしますね。怠惰でいい旅しようっていうのは、ちよつと強欲ですよ。普段の旅の準備がすでに旅だという考え方で準備すればいいのではないですか。かといって、あまりに勤勉な人だとコピーばっかり取ってます(笑)。



佐波の港町の裏通りで

**外川** 今ほんとに旅が便利になってしまい、昔のようにわくわく感、ドキドキ感がなくなってきたしまったことはあると思います。が、お二人の連載を読んで、まだまだ世界は国内も海外もワンダーにあふれていると、

すごく感じます。旅の魅力はまだいくらかもあるということ、最後にお二人から読者にメッセージをお願いします。  
**池内** それが一番難しいんだよね(笑)。旅先でお会いしましょう、と。旅はこうあってほしいというものはずいぶんしゃべりました。僕の旅はもうそろそろ終わりですから、これまで訪ねて気に入った所を訪ねる再訪の旅、少し寂しいけれど、そろそろやる時期かなと思っています。その場合は、その場所に一週間とか十日間は過ごして、かつての時間を復元するような旅を試してみたいなと思います。

**山口** よく自分探しの旅とかいいますが、どこかの街角に自分が埋まってるってことはなくて。ただ、旅というものが自分探しとつながるとしたら、やっぱり普段と違う所

に身を置くと、パーツと感性が開くじゃないですか。自分はこんなことに興味があったんだとか、こんなことが得意だったとか、そういう思わぬことを発見することがあると思うんですね。純粹に旅を楽しむつもりで楽しんでいくうちに、気づかなかった自分に気づくっていうことはあると私は思います。

**池内** (猫の写真を見ながら) これは旅の自分の姿だと思ってるんです。物陰に逃げ込んでいるのを撮りました。好奇心いっぱい、こいつは何だろうと思ってる。

**外川** 旅の原点はやっぱり好奇心ですね。好奇心を持ち続けられれば、いい旅ができる。

**池内** 自然にできますね。

**山口** ただ、その好奇心もパッケージツアーからもらおうと思っても駄目ですよ。好奇心は商品みたいに注文できるものじゃない。

**池内** 人に教わらない、生まれながらの好奇心ということですね。

**外川** 今日は本当に長時間にわたり、ありがとうございます。これからも楽しい連載に期待しております。



■旅行年報2009

直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料をもとに分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。○九年九月発行。

■旅行者動向2009

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果をビジュアルに解説。○九年八月発行。

■自主研究レポート2009/2010

当財団が重点的に取り組んでいる、自主研究一〇の調査研究成果をまとめた論文集。わが国の旅行・観光に関する現代的な諸問題や今後取り組みが必要となるテーマに着目。主催シンポジウムや出版物などの概要も紹介。オピニオンリーダーに聞く旅行者モニター調査、コミュニティ・ベスト・ツーリズムに関する調査研究(アータン王国編)(ニュージーランド編)、海外旅行マーケットの成熟化およびヨーロッパ方面への旅行市場研究(旅行のストレス低減効果)に関する研究など。一〇年三月発行。

■観光実践講座講義録 最新刊

地域主体の観光・身近な里海・里山で活きる。

毎年十一月に実施している二日間の講座講義録、平成二十一年度の講師は、南房総市商工観光部観光プロモーション課副主幹／(株)とみうら(枇杷倶楽部)取締役・福原正和氏、海島遊民くらぶ代表・江崎貴久氏、飯山市税務課収税係長・出澤俊明氏、稲取温泉観光協会事務局長・渡邊法子氏、(社)平戸観光協会会長・籠手田恵夫氏。一〇年三月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。担当：財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03.5.2008.4704 http://www.jtb.or.jp



次号予告

●地域活性化の牽引役として「みなとまち」に大きな期待が寄せられています。次号では、人と物が行き交う交流拠点「みなとまち」の賑わいを取り戻すための施策と全国各地の取り組みを紹介します。

調査研究だより

●本年度から観光庁により観光入込客統計に関する共通基準が全国で導入され、都道府県において独自の方法で行われていた観光入込客統計の方法が統一化されることとなります。二〇〇七年から観光庁により実施されている宿泊統計に続き、観光に関する統計が整備されつつあります。

●共通基準では、都道府県は、観光客に対して一年に四回、調査員による聞き取り調査を実施することとなりました。聞き取り調査は、精度の高い調査票を回収することができるといふメリットがある一方で、実査のために費やす時間・コストは留め置き調査に比べ大きくなります。観光入込客統計は、地域が観光戦略を策定する際の基礎的なデータとして必要ですが、継続的に調査を実施していくためには安価で効率的に調査を行うことが重要になってきます。当財団では、地域が主導的に調査を実施できるようなネットシステム導入等の調査方法の検討にも取り組んでまいりました。

●今後も、地域が持続的に観光まちづくりに取り組んでいくよう、観光客の実態調査や満足度調査等の実施を支援してまいります。

(高崎)

編集後記

◆本号でも紹介されていますが、東京国立博物館で開催された「国宝土偶展」を見る機会がありました。国宝に指定された土偶三点すべてが一堂に会する初めての機会、と関心を集めました。いずれも片手に乗るほどの小ささですが、その豊かな造形力と精神性に思わず引き込まれます。幾千年の時空を超えて縄文文化が現代人に静かに語りかけます。自然との共生、地球環境の保全が人類の課題となっている今日、縄文人のころに学ぶことは多々あると思います。

◆縄文時代は一万年近くにわたり日本列島の各地で続きました。その間、狩猟採集生活をベースとしつつ定住化を進め、社会的な営みのもとに高い精神世界を築いたことは真に驚異です。日本列島の自然の豊かさを再認識すると同時に、縄文文化までさかのぼる日本文化の悠久の歴史に思いをはせます。

◆縄文遺跡を多数有する北海道、北東北三県が連携して域内の遺跡群の世界遺産登録を目指しています。「JOMON」が世界に知れ渡りエゴロジを代表する日本の新しいブランドとなることを願ってやみません。

◆縄文の精神は、現代に生きる私たちに今こそ自然と共生するライフスタイルの確立を訴えていると考える次第です。

(宇八)



## 観光文化 第201号

第34巻3号通巻第201号

発行日 2010年5月20日



発行所：財団法人 日本交通公社  
東京都千代田区丸の内 1-8-2  
第一鉄鋼ビル  
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701  
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2  
第二鉄鋼ビル 旅の図書館内  
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051  
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八  
発行人：新倉武一



印刷所：JTB印刷株式会社

禁断転載

ISSN 0385-5554